

# 丘中学校遺跡

—長野県塩尻市広丘野村丘中学校遺跡発掘調査報告書—

1983

塩尻市教育委員会

## 序

丘中学校遺跡は塩尻市大字広丘野村にあり、田川の左岸高位段丘面上に位置し、以前より付近一帯は旧石器時代から平安時代の長期にわたる高出遺跡群として知られていました。この度、丘中学校新体育館建設工事に伴い遺跡の一部が破壊されることになったため、工事に先立ち発掘調査を行うことになりました。

発掘調査は花村格氏を団長に、昭和57年7月11日から同23日にかけて実施しました。今回の調査では、その立地の好条件によって弥生時代から平安時代の長期間にわたった生活址が確認されました。特に今回発見された方形周溝墓は松本平が今まで空白地帯とされていた貴重なものであり、また出土した多量の土器、金属器類は松本平南部地域の該期研究を進めていくうえで極めて貴重な資料を提供したといえましょう。

この発掘調査が無事完了するについては、丘中学校校長新村美郎氏、更には同P.T.A会長御子柴亀雄氏をはじめとして多数の方々の深い御理解と暖かい御援助によるものであり、ここに心から敬意と感謝をささげる次第であります。

報告書の発刊にあたっては、調査団長をはじめとして多数の方々の御尽力によるものであり、重ねて謝意を表するものであります。

昭和58年3月

塩尻市教育委員会

教育長 小松 優一

## 例　　言

- 1 本書は塩尻市立丘中学校新体育館建設事業に伴う丘中学校遺跡（長野県塩尻市大字広丘野村所在）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、丘中学校遺跡発掘調査団（団長　花村格氏）に委託し、現場での調査は昭和57年7月11日から7月23日まで行った。
- 3 遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、昭和57年7月から昭和58年2月にかけて行った。その過程では次の方々の協力を得た。記して感謝申し上げたい。分担は次のとおり。  
遺構…整理、トレース；小嶋。  
土器…実測；前田、島田、小林。…トレース；小嶋、前田。…拓本；小林。  
石器…実測、トレース；大竹、深井。  
金属器…実測、トレース；前田、島田。  
ガラス玉…実測、トレース；小林、小嶋。  
図版組み…小嶋、前田、上條、小口、鳥羽、小林。（敬称略）
- 4 本書の編集は小林が行い、花村格団長が校閲した。
- 5 墨書、花瓶、瓦の鑑定は米山一政、小松克巳、桐原健の各氏にお願いし、また方形周溝墓については現地で神村透氏の御教示をいただいた。銘記して深く感謝申し上げたい。
- 6 調査にあたり、丘中学校校長新村美郎氏、同PTA会長御子柴亀雄氏、ならびに学校関係職員、役員、PTAおよび生徒の方々の御理解、御援助をいただいたことを明記し、お礼としたい。
- 7 出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

## 目 次

### 序 文

### 例 言

第Ⅰ章 調査の経過.....	1
第1節 調査に至るまでの経過.....	1
第2節 調査日誌.....	2
第Ⅱ章 遺跡とその環境.....	4
第1節 遺跡の立地および自然環境.....	4
第2節 歴史的環境.....	6
第3節 過去の調査の概要.....	9
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物.....	10
第1節 調査の概要.....	10
第2節 方形周溝墓.....	12
第3節 住居址.....	18
第1・2・3・4・5号住居址	
第4節 小竪穴.....	32
第5節 環状土器集積遺構.....	34
第6節 遺構外出土遺物.....	42
第Ⅳ章 まとめ.....	44
第1節 高出遺跡群と水利.....	44
第2節 方形周溝墓.....	47
第3節 住居址と小竪穴.....	55
第4節 環状土器集積遺構.....	62
第5節 墓石と瓦と仏具.....	65
第Ⅴ章 結 語.....	66

## 図 目 次

- 第1図 丘中学校遺跡位置図
- 第2図 遺跡付近の層序断面図
- 第3図 遺跡分布図
- 第4図 丘中学校遺跡発掘調査地区図
- 第5図 丘中学校遺跡全体図
- 第6図 方形周溝墓
- 第7図 方形周溝墓主体部
- 第8図 方形周溝墓主体部出土鉄釧実測図(1)、(2)
- 第9図 方形周溝墓主体部出土ガラス玉、管玉実測図
- 第10図 第1号住居址
- 第11図 第2号住居址
- 第12図 第1・2号住居址出土土器
- 第13図 第3号住居址
- 第14図 第3号住居址土器出土状態
- 第15図 第3号住居址出土土器(その1)
- 第16図 第3号住居址出土土器(その2)
- 第17図 第4号住居址・第19~21号小竪穴
- 第18図 第4号住居址土器出土状態
- 第19図 第4号住居址出土土器
- 第20図 第5号住居址
- 第21図 第5号住居址出土土器
- 第22図 第1号~16号小竪穴
- 第23図 第17・18号小竪穴
- 第24図 環状土器集積遺構
- 第25図 環状土器集積遺構ブロック図
- 第26図 第17・18号小竪穴と環状土器集積遺構との関係
- 第27図 環状土器集積遺構土器出土状態図(その1)
- 第28図 環状土器集積遺構土器出土状態図(その2)
- 第29図 環状土器集積遺構出土土器(その1)
- 第30図 環状土器集積遺構出土土器(その2)

- 第31図 環状土器集積遺構出土土器(その3)  
 第32図 環状土器集積遺構出土土器(その4)  
 第33図 遺構外遺物  
 第34図 花瓶  
 第35図 瓦  
 第36図 段丘面区分図  
 第37図 塩尻市焼町遺跡検出方形周溝墓  
 第38図 平出遺跡検出円形周溝墓  
 第39図 平出遺跡円形周溝墓出土遺物  
 第40図 県内周溝墓分布図  
 第41図 方形周溝墓平面形態分類図  
 第42図 方形円形周溝墓の規模  
 第43図 主体部の規模  
 第44図 ガラス小玉断面図  
 第45図 ガラス小玉の大きさ  
 第46図 丘中南・1965年以前の丘中遺跡調査遺構配置図  
 第47図 丘中・丘中南遺跡発掘調査地区図  
 第48図 環状土器集積遺構出土土器分類図

## 表 目 次

- 第1表 丘中学校遺跡周辺の遺跡  
 第2表 ガラス小玉一覧表  
 第3表 管玉一覧表  
 第4表 小豎穴一覧表  
 第5表 段丘面群の分類  
 第6表 住居址・小豎穴に伴なう礫の石質分類  
 第7表 方形・円形周溝墓一覧表  
 第8表 丘中学校遺跡住居跡住居址一覧表  
 第9表 丘中南遺跡住居址一覧表  
 第10表 県内における古墳～平安時代の大型住居址  
 第11表 丘中学校遺跡出土土器一覧表

## 第Ⅰ章 調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

塩尻市では、昭和57年度事業として市内広丘野村に所在する塩尻市立丘中学校の体育館建設が実施されることになった。この体育館建設予定地は、先土器、平安時代を中心とする丘中学校遺跡に含まれているため、工事施工前に発掘調査を行ない、記録保存することになった。発掘調査は、塩尻市教育委員会が主体となり、丘中学校遺跡発掘調査団に委託し実施された。

発掘調査団団長には、前平出遺跡考古博物館々長花村格氏にお願いし、調査員には中信地区在住の考古学研究者に、また、調査補助員には信州大学考古学研究会の諸氏にお願いした。団長はじめ諸先生方には、それぞれ本務の仕事及び他の調査等極めて多忙の中で、発掘調査を実施し、しかも煩雑な整理、報告書作成を短期間にまとめていただくという大変な御無理をお願いした。この御労苦に対し心から感謝申し上げる次第である。

また、発掘作業にあたっては、丘中学校の新村校長先生をはじめとする先生方、PTA御子柴会長ならびに役員の方々には調査期間中種々の御指導、御援助をいただき、更に在校生徒多数とともに実際の作業にも御参加をいただきましたことに対し、厚く感謝申し上げる次第である。

発掘調査のための組織は次のとおりである。

団長：花村 格

調査員、調査補助員：

石上周藏、島田哲男、小林康男、込山秀一、大竹庄司、小鳴秀典、深井幸人、前田清彦  
土屋 浩、安塚弘明、堀田直人、金子順一、堀田貴之

一般：

今井百合子、矢彦沢公江、長村素蘭、水原郁子、藤森幸子、折橋つぎ子、田中貞美、倉科和子、上條ミホ子、山田正子、北原真江、伊東照子、田中洋子、大久保瑞穂、樋口藤男、柳沢美代子、大和芳江、塩原道江、三村悦子、大木俊彦、小松正義、上野徳博、慈谷通正、酒井昭子、百瀬千恵子、百瀬晴美、津田清、重野賀代子、上野村江、上野弘視  
小口令子、山中島君子、中野実佐雄、鳥羽嘉彦、伊東直登、三島信子、佐藤佑子、鳥山初子、手塚政子、川上美智子、依田富美子、井口恵子、小川今朝子、小沢なを江、塩原弘子、古畑美代子、小林志づ子、飯田和子、松崎則子、古畑こずえ、古畑忠子、塙原満

夫・平林節子・上條隆子・山田ふなえ・近藤弘子・百瀬千恵子・近藤千恵子・小松恵美子・大槻芳子・御子柴みよ子・芳沢容子・高山つくみ・竹下美佐子・西村栄子・土田常子・青柳泰子・中嶋ひさ美・横山与み・佐藤三千代・蛭川澄子・百瀬昇・赤羽周・御子柴亀雄・須沢康也・小沢香代子・齊藤節雄・小松八重子・小松かつ子・小松節子・青木昌子・林新子・小沢一雄・塚原富美子・松沢ふじ江・篠宮栄江・古旗昌子・丸山広美・六浦智子・麻田喜子・古瀬容子・早出君枝・丸山有朋・鈴木栄一・上条修子・岩波允子・谷口文子・高橋孝江・熊谷八重子・柳田雅子・小原健次・田辺つた子・大野千代子・川上修・村上健夫・溝尾宮子・五味とよ子・横山米子・横山里子・池田貴江子・横山智恵子・安江美代子・池田しのぶ・浜経子・中野房子・小口令子・南沢幸子・鳴崎光子・小松すく子・小松絃子・中野栄作・青木佐和子・小松徳江・石川秀雄

(事務局)

## 第2節 調査日誌

7月8日（木）バックホー、ブルドーザーにて発掘調査予定地の削平を行なう。削平时に土器が多量に出土する場所および住居址状の黒色土の落ち込み2ヶ所が注意された。

7月12日～13日（月・火）発掘調査器材の運搬

7月14日（水）遺構の検出。第1号・2号住居址を確認する。

7月15日（木）本日より中学校PTAおよび生徒が参加。遺構の検出を行ない、新たに第3号4号住居地および中央部に広範囲にわたった落ち込みが確認される。

7月16日（金）引き続き遺構の検出を行なう一方、中央部分の落ち込みの掘り下げを開始。

7月18日（日）PTA、丘中学校社会科クラブ、市中央公民館考古学講座聽講生等多数の参加があり作業はおいに進む。第3号住居址の掘り下げと一部作図。第4号住居址の掘り下げおよび、中央部分に小竪穴を多数検出し、これを掘り下げる。

7月20日（火）小竪穴群の精査、写真撮影。第2号・3号・4号住居址の掘り下げ、精査と一部作図。土器集中地区の検出。第4号住居址西側に溝状遺構を検出し、性格究明のために南側を重機にて拡張する。

7月21日（水）第2号・4号住居址の作図、写真撮影。小竪穴群の精査と作図。土器集中区の精査と土器の出土状態の作図。溝状遺構の性格を明らかにするために落ち込み部分の検出を行なった結果、方形周溝墓と確認される。主体部の検出と周溝の一部掘り下げを実施。

7月22日（木）土器集中区の土器出土状態の作図と土器の取り上げ。方形周溝墓の周溝の掘り下げ、主体部の掘り下げ。主体部から鉄鏃、ガラス小玉多数出土。中央部分の広範囲にわたる落ち込みは結局大形住居であることが判明する。

7月23日（金）方形周溝墓の主体部を精査し、作図。大形住居（第5号住居址）の精査と作図。

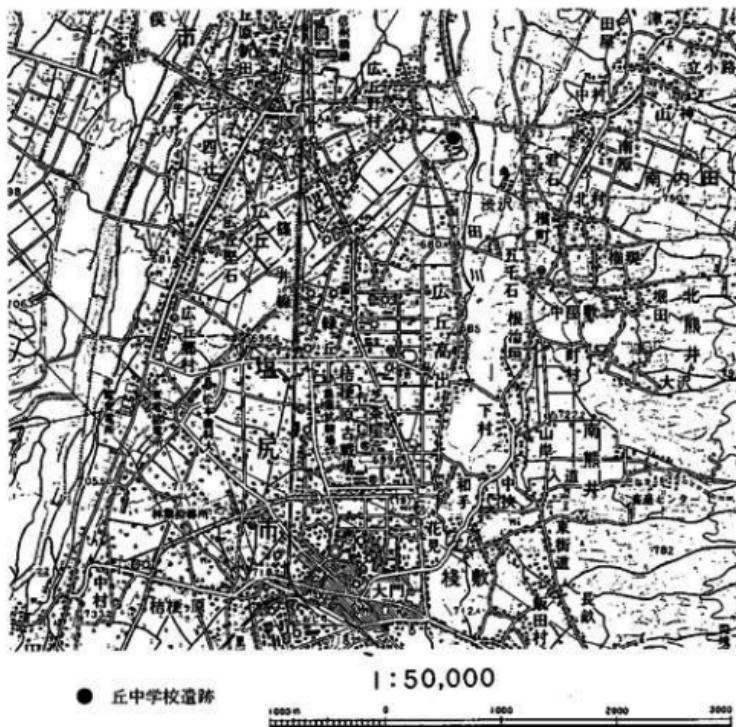
土器集中区では、土器の取り上げ後、土器の下部の掘り下げを行なう。下部は小豎穴となっている。調査地区全体図作成。本日で現場における作業を終了する。

1月～3月、平出遺跡考古博物館にて出土遺物の洗浄・注記、復元作業を行う一方、実測図、写真、スライド等記録類の整理、整図、遺物の実測、拓本、図版作成を実施する。また、これにあわせて、報告書の原稿執筆を行う。  
(事務局)

## 第II章 遺跡とその環境

### 第1節 遺跡の立地および自然環境

#### (1) 遺跡の位置と周辺の地形 (第1図)



第1図 丘中学校遺跡位置図

丘中学校は塩尻市大字広丘野村地籍にあり、塩尻市の北半部である広丘、片丘両地区を通学区としている。国鉄中央線広丘駅から東へ約2km、付近一帯に展開する水田地帯の中に南より伸びる台地があり、その坂道を登りきった上位面に位置している。

この付近は塩尻市の東と西を北流する田川と奈良井川の二河川によって形成された河岸段丘のうち、両河川に挟まれた高位段丘面で、現在の市街地が展開する桔梗ヶ原面の北端段丘線に位置する。段丘は洪積世末期の隆起運動の際、西側の奈良井川側が東側の田川側に比して差別的に隆起したために、北端の平面形態は尖頭状になり、あたかも松本平に張り出した岬の先端のような形状を示している。

海拔は670m前後で、眼前には比高差5mの段丘崖をもつて野村、吉田の地域が、更には松本平が展開しており、西方約8kmに北アルプスの峻嶺が、東方約3kmに緩やかな東山の山並みが、屏風絵のごとく続く絶景を呈し景観に恵まれている。

段丘上には、ここから国道19号線と国道20号線の分岐点である高出交差点付近にかけて南北2.5km、東西300mの広範囲にわたって高出遺跡群が分布しており、旧石器時代から縄文、弥生、古墳、平安の各期に及んでいる。今回調査地域となった丘中学校遺跡は現体育馆の北側、段丘崖とのわずかな距離に植生する赤松林中にあり、從って高出遺跡群の最北端に位置しているといえよう。

この上位面は水田地帯となっている下位面と対照的に水利に著しく乏しいのが特徴で、地下水位も低く「桔梗ヶ原の葡萄」に代表されるように畑地利用にとどまっている。古代においてはなおさら生活用水の確保として、段崖直下を流れる田川への依存度が強かったと推測される。

田川は塩尻峠に源を発し、塩尻東地区を経て、大門市街地の東側に沿って北流する河川である。後背地に善知鳥峠、大芝山などに産する石灰岩体を有するため、概して硬度の低い松本平の諸河川の中では比較的高い値を示してはいるが、奈良井川等に比べて水量が少なく、浸食作用の小さな安定した河川である。このため前述したように、この河川に沿って長期にわたって集落が営まれており、数多くの遺跡が確認されている。

## (2) 層序 (第2図)

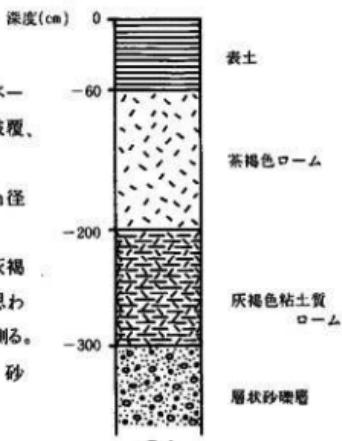
この付近の地層は桔梗ヶ原面を構成する波田砾層をベースとして厚い波田ローム層が乗り、更に表土がこれを被覆している。

砾層は層状を呈し淘汰の良好な砂砾層で、4~8cm径の亜円砾を主体とする。

ロームは2層に大別され、下位は層厚100cmを測る灰褐色粘土質ロームで層状を呈し水の影響を受けていると思われる。上位は茶褐色の鮮明な風成ロームで層厚140cmを測る。

表土は森林の暗色腐殖質埴土でボクボクしており、砂礫はほとんど含まない。最大層厚60cmを測る。

遺構はローム層最上部にまで掘り込まれている。



(鳥羽嘉彦)

第2図 遺跡付近の層序断面図

## 第2節 歴史的環境

本遺跡は松本平南端の田川の形成した段丘上に位置し、高出・野村地籍にまたがる高出遺跡群中の遺跡である。周辺には多くの遺跡が存在する。それらの遺跡は立地から大きく、三つに区分することができる。第一に田川低位段丘面上に立地する遺跡、第二にそれより5m程高い高位段丘上の遺跡（本遺跡が属す）、第三には、片丘地区の田川へ張り出す台地とその背後に続く丘陵上の遺跡である。それぞれ時代ごとに展開の仕方が異なる（第3図、第1表）。

旧石器時代—高出遺跡群1黒崖、第I地点、第V地点、北ノ原）から、ポイント、ナイフ形石器などが出土している。また小丸山遺跡からもポイントが出土している。

縄文時代—高出第IV地点より早期の押型文土器が出土している。山形文、隋円文を中心とした桶沢タイプのものである。高出第III地点からは中期初頭の土器片が出土しており、川西遺跡、花見向井遺跡など中期初頭から後半にかけての土器がみられるが、これら田川治い低地の遺跡はまばらで、規模も大きくない。小丸山遺跡からは、中期の住居址が26軒検出され、中心はこれら標高760～780mの丘陵面にあったと思われる。後・晚期になると、ややおりて、670～680m前後までおりてくる。遺跡としては洪沢・君石・下境沢・新田遺跡などが上げられる。

弥生時代—高出第II地点（北ノ原）、下境沢遺跡からは中期前半の波及期の土器片が得られている。有瀬期の遺跡としては一夜窪が上げられる。さらに後半になると遺跡は増加し、向井、花見、一夜窪、北ノ原、第V地点狐塚、大原遺跡が上げられ、特に、大原は2軒、北ノ原は2軒、第V地点からは1軒の住居址が検出されている。第V地点の土器の中には、座光寺原式土器もみられる。また丘中学校からは、東海系の二重口縁を有する壺形の土器も出土している。

古墳時代—近くに古墳もなく、生活址の調査も不十分で、実態は明らかでない。

奈良時代—高出I地点より円面鏡などがみつかっている。奈良期も実態は判然としていない。

平安時代—遺跡数が急激に増加する。また、立地も大きく、高出、吉田向井などの低地性の遺跡に対して、内田原、舅屋敷などのような丘陵性の遺跡とに分かれる。吉田向井遺跡からは85軒の住居址が検出された。高田遺跡のような低位段丘上にも展開している。（石上周蔵）

### 参考文献

藤沢宗平他「松本諏訪地区新産業都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告」 S41

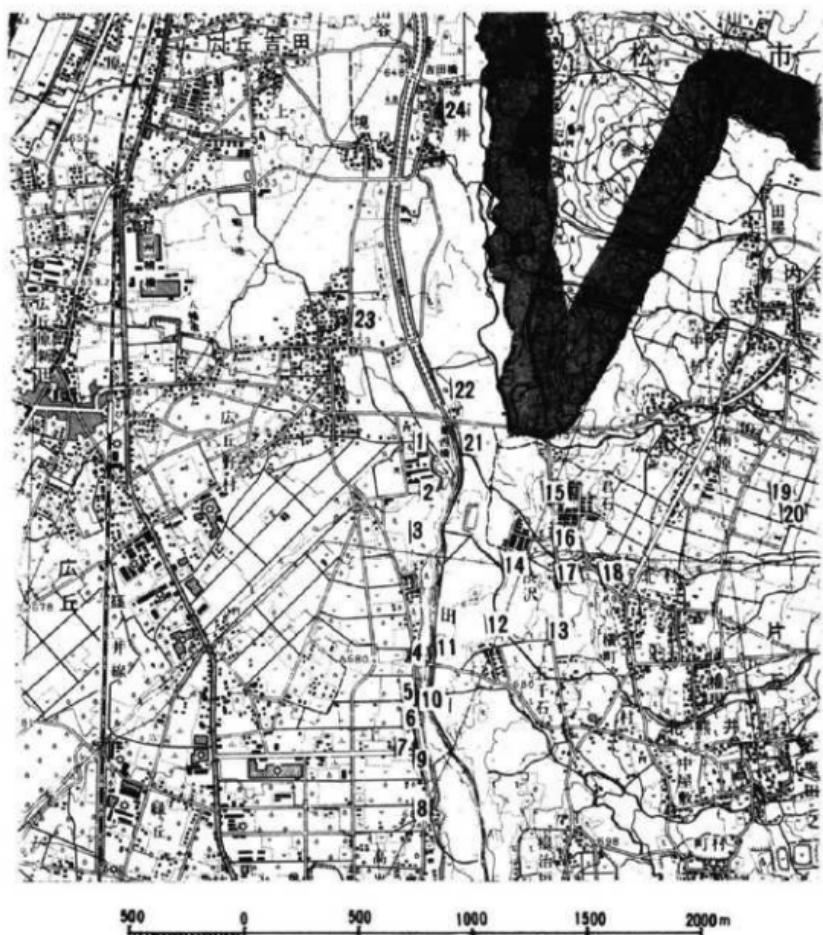
東筑摩塙尻郷土資料編纂会「東筑摩郡松本市塙尻市誌」 第二巻歴史上 S48

塙尻市教委「高田遺跡」 S54

原嘉藤他「長野県塙尻市内田原遺跡調査概報」 S44（信濃21-6）

原嘉藤他「長野県小丸山遺跡緊急発掘調査概報」 S45

塙尻市教委「舅屋敷」 S57



- |        |          |         |         |
|--------|----------|---------|---------|
| ①丘 中学校 | ②高出 第 I  | ③丘中学校南  | ④黒<br>崖 |
| ⑥一 夜 嶺 | ⑦高出 第 IV | ⑧高出 第 V | ⑨北      |
| ⑪大 田   | ⑫別 方     | ⑬新 田    | ⑭君 石    |
| ⑮下 境   | ⑯日 向     | ⑰狐 塚    | ⑲沼 田    |
| ⑳高 田   | ㉑花 見     | ㉒野 村    | ㉓内 井    |
| ㉔高 井   |          |         | ㉕小 丸 山  |

第3図 遺跡分布図

第1表 丘中学校遺跡周辺の遺跡

	遺跡名	場所	標高	田石器時代	縄文時代			弥生時代		古墳時代	歴史時代	調査有無
					早期	前期	中期	後期	中期			
第一段丘西	向井	吉田	645~650	・			○	○		○	○	S57年
	花見	広丘野村	650~658				○			○	○	S54年
	高田	*	*							○	○	
第二段丘西	野村	広丘野村	650~655	・	○	○	○				○	S40年
	高出第I地点	*	*				○				○	S51年
	丘中南	*	670~672		○	○	○				○	
	異塚	*	676~680		○	○					○	
	一夜蓮	広向高出	680~683		○	○		○	○	○	○	
	北ノ原	*	681~686						○	○	○	S30年
	高出第II	*	680前後		○	○(1)	○		○	○	○	S40年
片丘地区	第III	*	*	・					○	○	○	S40年
	第IV	*	*						○	○	○	*
	第V	*	*		○				○	○	○	*
	別方	片丘北熊井	672~682				○		○	○	○	S40年
	浜渡石	片丘 省口	675~680					○	○	○	○	
	日向	片丘北熊井	679~688					○			○	
	氣賀	片丘 *	690~698					○		○	○	
大原	新田	*	678~682	・					○	○	○	S44年
	内田原	片丘南内田	750~770				○2軒				○	○(18)軒
	小丸山	*	760~780								○	S44年
羽留敷	羽留敷	片丘北熊井		・		○5軒		○			○3軒	S47年

### 第3節 過去の調査の概要

丘中学校遺跡は高出遺跡群の中でも時間的な承続性および遺構・遺物の遺存状態の密度の高さから中核的な遺跡として知られている。本遺跡の調査は昭和32年から昭和52年まで断続的に実施されている。

昭和26年に藤原宗平氏等が高出遺跡群として、丘中学校から裏の原までの調査を行ない、この結果は信濃史料第一巻上の地名表に収録されている。さらに昭和31年～32年にかけて、丘中学校敷地内で、藤原宗平・田中守氏等による発掘調査によって6軒の平安時代の住居址が確認されている。この内完掘され全形のプランが判明したのは2住居址で、両者とも約4.0m四方のほぼ正方形に近いプランを呈している。出土した遺物は土師器・須恵器・鉄器などである。土師器は各住居址から多数の出土を見るが、須恵器は土師器にくらべ少數である。

松本諏訪地区新産都市決定に伴う緊急分布調査の実施により、昭和40年8月、前述の調査などに基づき本遺跡の発掘調査が行なわれた。この調査により、当時、松本平で空白期となっていた先土器時代の遺物18点が、漸移層およびローム層中20cmまでにわたって出土している。これらの石器群は一応一括資料として把握できるとされている。前記の遺物出土地区の南から平安時代の2住居址が発見されている。2住居址共に比較的小形の隅丸方形のプランを持つ住居址である。これらの時代の遺物は土師器・須恵器・砥石・鉄器などが出土している。

昭和50年代に入ると高出地域も開発が進み、これに伴う発掘調査が増える傾向にある。昭和52年には、丘中学校南側にグラウンドが造成される事となり、事前調査が実施された。この調査により平安時代の住居址15軒が確認された。その結果は、第IV章第3節および第8・9表にその概要が述べられているが、当遺跡が当初予想されたよりも更に大規模な遺跡であることが判明した。また、同年丘中学校改築に伴い校庭の一部を発掘調査をしたが遺構の検出はされなかった。松本平でも、代表的な遺跡稠密地帯の1つである高出遺跡群の解明は、松本平の原始・古代を明らかにするために大きな役割を果すものと考えられる。この高出遺跡群の中でも中核的存在である丘中学校遺跡の調査の果す意義は大きなものがある。

(中野実佐雄)

## 第III章 発見された遺構と遺物

### 第1節 調査の概要

今回の丘中学校遺跡の調査は、発掘総面積1200m<sup>2</sup>に及んだ。田川の河岸段丘高位面の北端に当たり、松林を切り開いての発掘調査となった。(図4・5)

この結果、竪穴住居址5軒、小竪穴21ヶ所、方形周溝墓1、環状土器集積遺構1が検出された。またこれらに伴い多量の土器・ガラス小玉及び鉄製品・瓦・青銅製品・石器が出土した。詳しい内訳は次の様である。

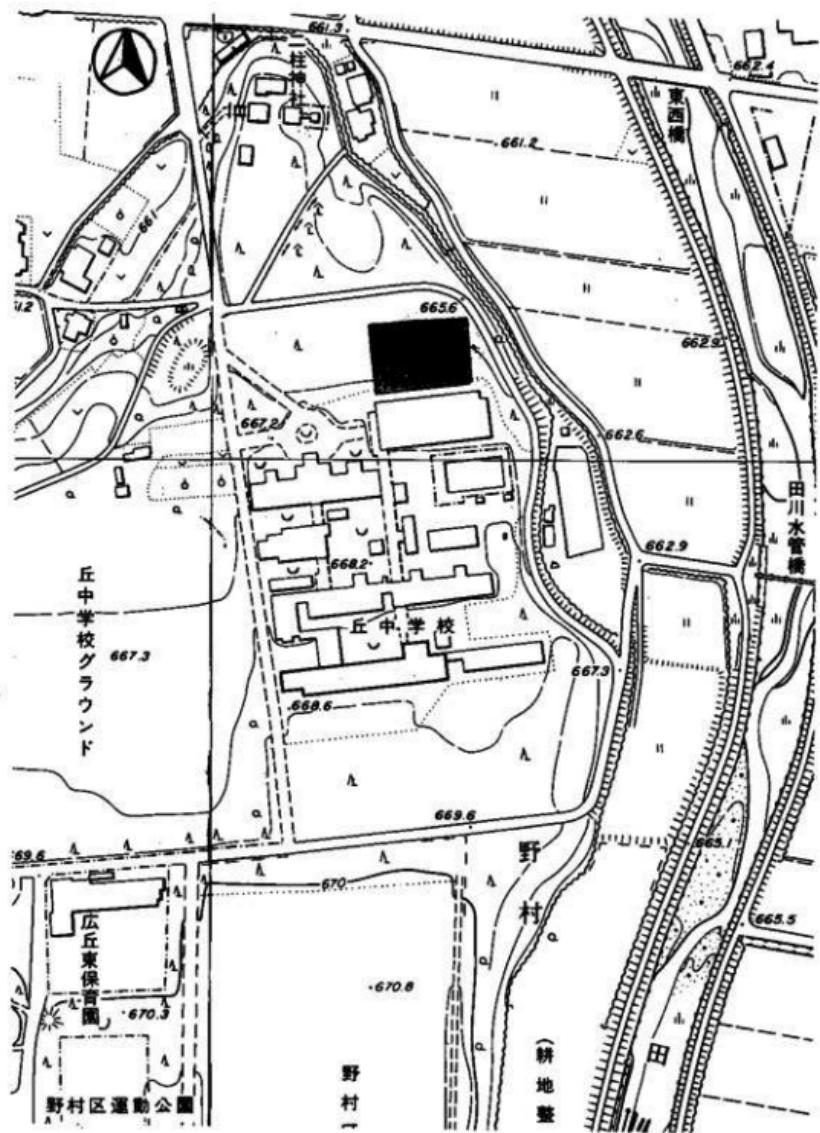
竪穴住居址はすべて平安時代に属する。第1号住居址は小型の住居址であり、第2号住居址は粘土組みカマドを東壁にもつ住居址である。第3号住居址は、今回の調査で最も保存状態がよく、土器も最も多く出土した。西壁に粘土組みカマドを持ち、周溝もみられた。第4号住居址は、東壁に石組み粘土カマドを設け、第19・20・21号小竪穴と重複している。第5号住居址は、巨大住居と推定され、9×10mのプランで、主柱穴を4つもつ。住居址からの出土遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器があり、器種としては壺・皿・塙等がみとめられる。

小竪穴は21ヶ所のうち16ヶ所が第5号住居址と重複もしくは近くに存在している。これら第1号～第16号は、瓦や青銅製の花瓶、さらに第3・4号住居址出土の寺の字が書いてある墨書き土器より、寺の建物址あるいは寺に附隨する墓跡と推定できる。小竪穴の形態から墓壙と考えた方が妥当と思われるが、墓壙とする決定的な出土遺物はまったくなかった。第17・18号小竪穴は、内部に人頭大の石をもち、第18号小竪穴の南側3分1は上面に環状土器集積遺構が重複している。第17・18号と環状土器集積遺構との関係は明確さを欠く。

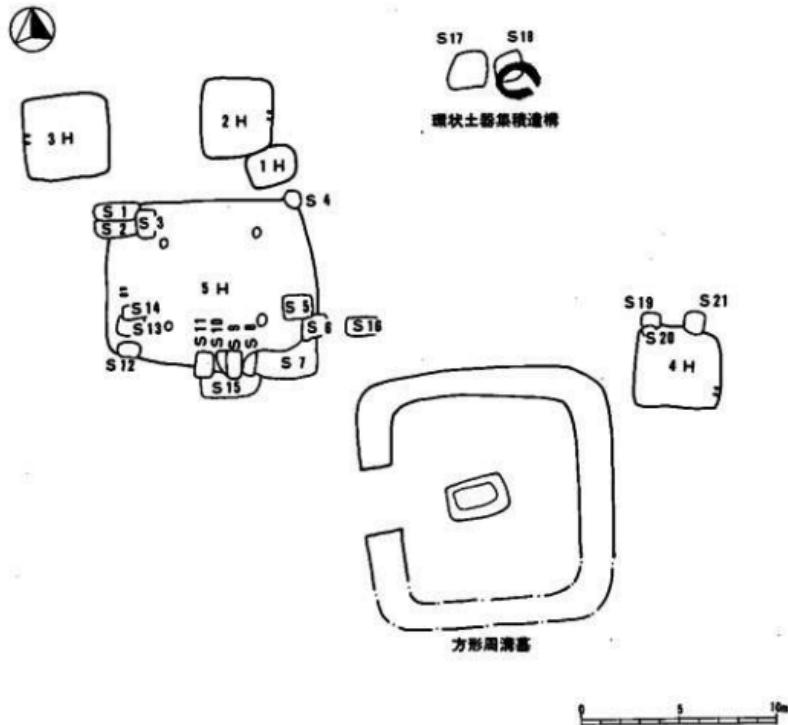
環状土器集積遺構は、外周短径約2m、外周長径約3m、内周短径約1m、内周長径約2mのドーナツ状に土器が10cm前後の厚みをもって集積している遺構で、約30個体以上が散在していた。従来、知られていなかった特異な遺構で、祭祀的性格の濃い遺構と推定された。

方形周溝墓は一辺13m、溝巾1.4mで西に陸橋をもち、主体部が2段構造(3.25×2.0m, 2.2×0.95m)になっている。主体部からはガラス小玉110個、管玉5個、鉄釧1個が出土した。時期は弥生時代末から古墳時代初頭にかけてのものである。

以上が今回の丘中学校遺跡調査の概要である。松本平で初めて方形周溝墓と断定できる遺構が検出されまた、特異な環状土器集積遺構の発見、そして「寺」の存在を強く推測させる遺物の出土など、今後の松本平における該期研究に貴重な一資料を提供することとなった。(小嶋秀典)



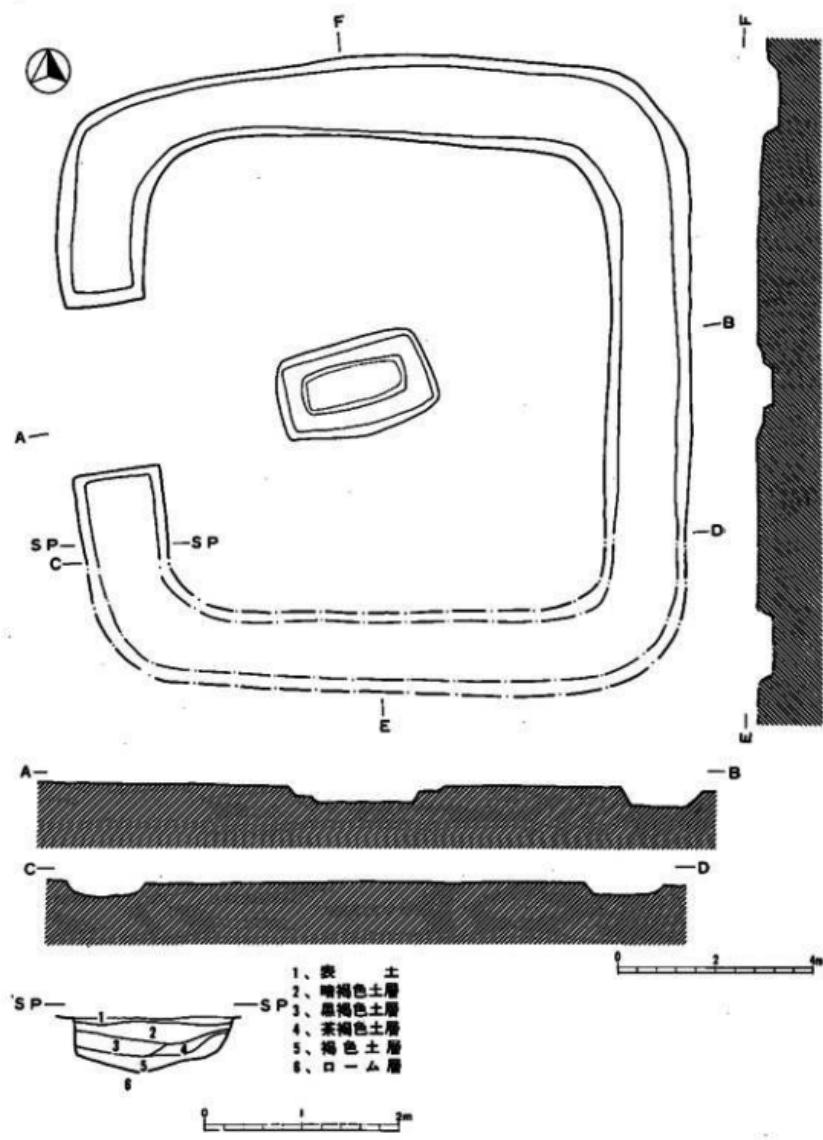
第4図 丘中学校遺跡発掘調査地区図



第5図 丘中学校遺跡全体図

## 第2節 方形周溝墓

**調査の経過** 第5号住居址と第4号住居址との中間の地域の遺構検出を行なっていたところ、ローム面に東西に延びる幅1m前後の溝状の黒色土の落ち込みが検出された。この溝状の落ち込みの長さは12~13mほどで、その両端は南側に折れ曲がり更に続いているものようであった。しかし、検出されたこの溝状の落ち込みは、重機によって削平した範囲の末端地域にあたり、この南側には削平時の塵土が盛られていて、この溝がどの位南に延びているのか判断しかねた。そこで急揚重機によってこの盛り土を除去し、その性格を把握することにした。重機による削平に引き続いて検出を行なったところ、溝は南側にも延びていることが確認され、この段階で方形周溝



第6図 方形周溝墓

墓の溝と判断された。しかし、残念なことに南溝は、調査区域外のため確認することができなかった。溝の検出が終了した後、主体部を検出したが、主体部は、明褐色土の覆土で明瞭に識別できる状態であった。なお、調査終了後、南溝の一部を調査する機会があり、南溝が切れることなく、他の溝と同様の状態で存在することを確認することができた。

**位置** 今回の調査区域の南中央部分にあり、東方1.5mに第4号住居址、西側2.5mに第5号住居址が、そして北方には13.5m隔てて環状土器集積遺構がそれぞれ存在する。この場所は、丘中学校遺跡の中でも北端に近い地域にあたり、段丘崖端からは、およそ35mほど内奥に位置する。

**平面形** 南側は調査区域外のため未調査であるが、調査後の南溝確認調査を参考とすれば、東西12.9m、南北13.4mの隅丸方形を呈し、西側の周溝中央部に、幅3.3mの陸橋部を形成する形態であり、主軸方向はN-85°-Eを示している。溝に囲まれた内側区域は平坦で、封土は確認できなかった。

**周溝** 北溝は、幅1.33-1.89mで、確認面からの深さは19-25cmである。掘り込みは傾斜を示し、底面はほぼ平坦である。東溝は、幅1.62-1.80mで、確認面からの深さは32-38cmと他の部分と比較し、若干深くなっている。掘り込みは、ほぼ垂直で、底面は平坦である。西溝は、中央部が陸橋（幅3.3m）となって切れているが、北側で幅1.72-1.98m、南側で幅1.70-1.81mを測る。確認面からの深さは、北側で33cm、南側で29cmと北側がやや深くなっている。掘り込みは傾斜を示し、鈍い。南溝は、幅は判然としないが、掘り込みは、40cmを示している。

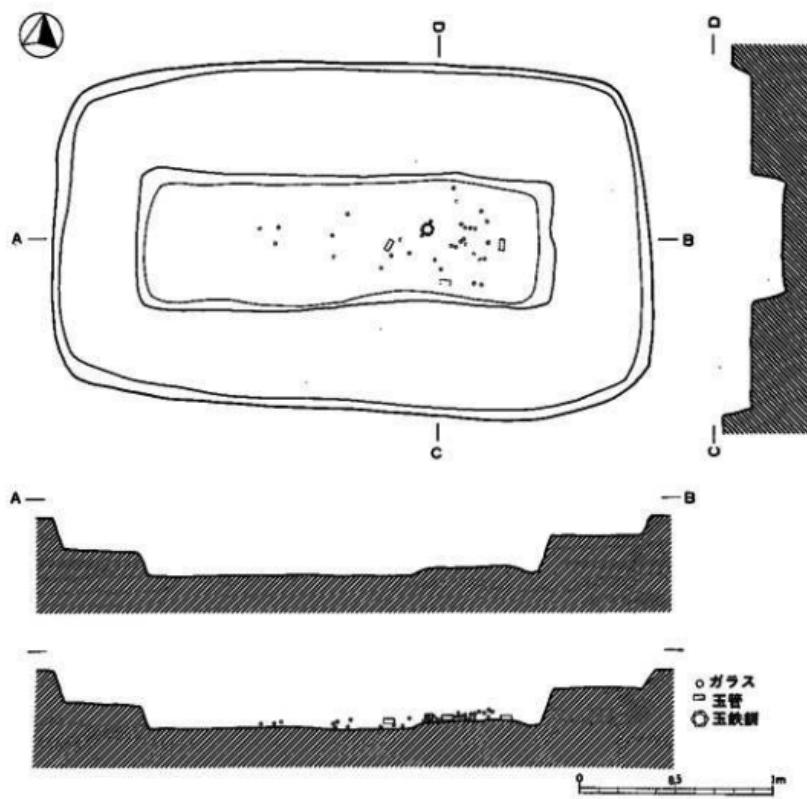
溝内の土層は、次の6層から成っている。

- |         |   |
|---------|---|
| 1層 表土   | 砂利、石炭殻等が混入し、暗褐色の砂壤土で、自転車の通路となっているため攪乱が著しい。  |
| 2層 暗褐色土 | 1層の混入物のない土質で、粘質を有す。マツ、スギ等の森林土壤で、粒は細かく粘性が強い。 |
| 3層 黒褐色土 | 木の根による黒色土の混入があり、4層より黒色度が強い。                 |
| 4層 茶褐色土 | 粘質が強い、3層とはほぼ同じ。                             |
| 5層 褐色土  | ローム粒混入で粘土質。                                 |
| 6層 ローム  | 砂質のローム土                                     |

各溝とも、2-6層は共通しており、1層は、南溝、東・西溝の南端付近に限って認められる。

**主体部** ほぼ中央部に位置し、2段に掘り込まれた土壌が1基検出された。土壌の主軸は、周溝の主軸より東に向かって17°北に片寄っている。土壌は、南北1.80m、南北3.11mの隅丸長方形を呈し、確認面からの深さは15-17cmを示し、更に内部を、南北0.71m、東西2.71mの長方形で、深さ18-21cm掘り込んでいる。したがって、土壌の中央部分は33-38cmの深さとなる。2段とも垂直に鋭く掘り込まれている。覆土は、小礫混入の明褐色土で、分層は不可能であった。

底面は、中央部および西側は平坦で非常に堅緻である。しかし、東側は、径50cmほどの部分が周辺より枕状に7cm前後盛り上っており、この部分には粘土などを固くつき固めて貼りつけたよ

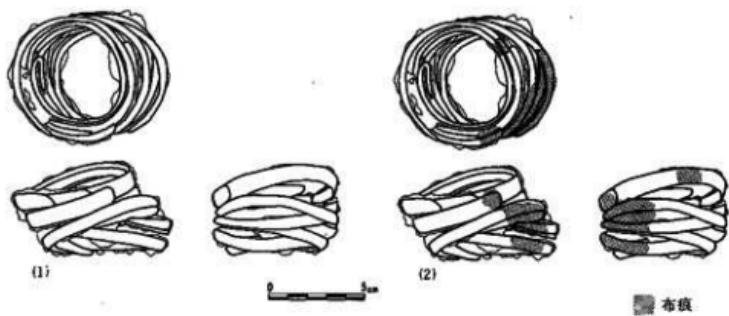


第7図 方形周溝墓主体部

うな状態となっている。

**遺物** 周溝内からは遺物は発見されなかった。しかし、主体部から、鉄釧、ガラス小玉、管玉の出土があった。出土状態は7図に示す如く、全て2段目の土壙内からの出土であり、しかも東側に集中している。枕状に盛り土がなされている付近への集中度が高く、あたかも鉄釧を中心取り囲むようにしてガラス小玉、管玉が出土している。こうした出土状態から、鉄釧を着装した腕を胸のあたりで交叉し、首から胸にかけて玉類を装った状態が推測された。こうしたことから埋葬の頭位方向は東側、つまり田川側を示すものと考えられた。

**鉄釧** 鉄釧は、腐食が進んでいるため細部については観察が行き届かない面がある。錆落とし



第8図 方形周溝墓主体部出土鉄釧実測図(1)、(2)  
(1)、平面、側面図、(2)、布痕付着状態図

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
◎	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	1	2	3	4	5			
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	●	●	●	●			
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

第9図 方形周溝墓主体部出土ガラス小玉・管玉実測図



第2表 ガラス小玉一覧表

番号	径 mm	高(厚)mm	色 調	断面	備 考
1	3.4	1.8	ブルー	I	
2	3.3	2.3	"	"	
3	3.4	3.8	"	II	
4	2.8	2.5	"	III	
5	2.9	1.8	"	I	
6	2.7	2.3	"	"	
7	2.8	2.2	"	"	
8	3.4	2.9	"	"	
9	3.6	2.1	"	"	
10	3.5	2.5	"	"	
11	3.1	3.0	"	"	
12	3.5	1.9	"	"	
13	3.8	2.2	"	II	
14	3.8	2.7	淡緑色	III	
15	3.3	2.8	ブルー	"	
16	3.1	2.1	"	I	
17	3.0	2.7	"	"	
18	3.6	1.9	"	"	
19	3.8	2.1	"	"	
20	3.0	2.8	"	"	
21	3.1	2.5	"	III	
22	3.2	1.8	"	I	
23	3.7	1.6	"	気泡	
24	3.1	2.2	"		
25	4.1	2.7	"	気泡	
26	3.9	2.8	"		
27	4.0	2.6	"		
28	3.8	2.7	"	II	
29	4.4	2.5	"	I	
30	4.4	3.3	"	"	
31	4.3	3.2	"	"	
32	3.9	2.8	"	II	
33	4.0	2.8	"	I	
34	4.1	2.7	"	"	
35	4.4	2.2	"	"	
36	3.5	2.4	"	気泡	
37	4.5	2.3	"		
38	3.1	2.8	"	III	
39	4.5	3.3	"		
40	3.2	2.6	"	II	
41	3.3	2.5	"	I	
42	3.8	2.2	"	"	
43	4.1	3.0	"	IV	
44	3.9	3.6	"		
45	3.9	3.1	"	"	
46	3.6	3.3	"	"	
47	3.6	2.7	"	III	
48	3.5	1.9	"	I	
49	3.7	2.5	"	"	
50	4.3	2.7	"	気泡	
51	3.5	2.4	"		
52	3.6	3.5	"	I	
53	2.9	2.6	"		
54	4.1	2.5	"	"	
55	3.8	2.9	"	"	
56	4.9	2.9	"	"	
57	3.3	3.9	"	"	
58	2.8	1.7	"	"	

番号	径 mm	高(厚)mm	色 調	断面	備 考
59	3.4	3.4	ブルー	I	
60	3.7	2.7	"	"	
61	3.9	2.9	"	III	
62	3.3	3.1	"	I	
63	3.5	2.0	"	"	
64	4.2	3.6	"	"	
65	3.6	1.8	"	"	
66	3.1	3.3	"	II	
67	3.3	2.9	"	"	
68	2.7	2.3	"	III	
69	3.2	1.6	"	IV	
70	4.0	2.5	"	I	
71	3.5	1.6	"	IV	
72	3.4	2.7	"	I	
73	3.6	2.4	"	"	
74	3.5	3.7	"	III	
75	3.2	3.3	"	III	
76	4.2	2.5	"	"	
77	3.5	3.2	"	II	
78	3.3	2.6	"	III	
79	3.1	2.9	"	I	
80	3.3	2.6	"	II	
81	3.9	3.1	"	"	
82	3.8	2.7	"	I	
83	2.8	1.3	"	"	
84	3.7	2.9	"	III	
85	4.1	4.5	"	"	
86	3.4	2.6	"	"	
87	4.0	3.1	"	I	
88	3.2	2.0	"	"	
89	3.2	2.2	"	"	
90	3.9	1.7	"	"	
91	3.9	2.3	"	"	
92	3.8	2.1	"	"	
93	3.4	1.8	"	"	
94	3.6	1.7	"	"	
95	5.0	2.6	"	"	
96	3.5	1.7	"	III	
97	3.3	2.2	"	II	
98	3.3	1.4	"	I	
99	3.4	2.8	"	"	
100	3.9	2.8	"	"	
101	3.7	2.8	"	II	
102	3.9	4.1	"	III	
103	3.8	3.0	"	"	
104	(3.6)	1.8	"	I	
105	(3.7)	2.4	淡緑色	"	
106	(3.2)	2.0	ブルー	"	

第3表 管玉一覧表

番号	径 mm	長さ mm	石 質
1	2.5	10.0	赤チャート
2	2.2	7.6	蛇紋岩
3	3.2	10.4	"
4	2.4	9.5	"
5	2.2	7.4	"

等保存処理を実施した後、再度報告したいと思う。ここではその概要のみ報告しておきたい。

第8図に示すように、埴施状に巻いたもので、おそらく3ないし4個が重なったものと思われる。それぞれ一巻きで一個体をなしているものと思われる。外径6.2~5.4cm、内径5.8~5.2cmで厚さ0.4~0.2cm、巾0.7~0.9cmの鉄線を巻いている。一部、鉄線の末端を折り曲げ鈎状にしている。鉄線の断面は凸レンズ状を呈する。また、側面には、布の痕跡が認められる。

ガラス小玉（第9図）破片も含めると110個の出土がある。詳しい計測値は第2表に示してある。色調は、コバルトブルーを呈するものと、淡緑色を呈するものとの2種類に大別できる。大部分が前者で、淡緑色はわずか2個のみである。大きさは、最大のもので直径5.0mm、最小のもので2.8mm、厚さは、最大で4.1mm、最小で1.3mmである。平均は直径3~4mm、厚さ2.5mmである。

管玉（第9図）5個出土し、内4個が緑色を呈し、1個が茶色を呈する。大きさは、長さ7.4~10.4mm、2.2~3.2mmを示す。茶色を呈するNO1は、長軸に平行して縫がみられ、製作時の研磨痕と考えられる（第3表）。

（小林康男）

### 第3節 住居址

#### （1）第1号住居址

調査経過 本住居址は第5号住居址の北側に位置し、第2号住居址の南側と接している。小規模なほん精円形の落ち込みがはっきりしていたため検出は比較的容易であった。また住居址中央から北側にかけて多数の礫が床面上に散在していた。

遺構（第10図） 本住居址は東西に2.7m、南北に2.0mと、小規模で、主軸を東西方向にとる、やや隅のある精円形をした遺構である。床面はやや起伏があるものの平坦で、水平である。また床面の状態はやや軟弱ではあるが良好なものであった。東側突出部に長径50cmの不整形なピットがあり、最深部で床面からの深さ15cmであった。壁は第2号住居址と接する部分以外は良好に遺在する。壁の掘り込みは東西側が傾斜を持ち、南北側がほぼ垂直に掘られている。

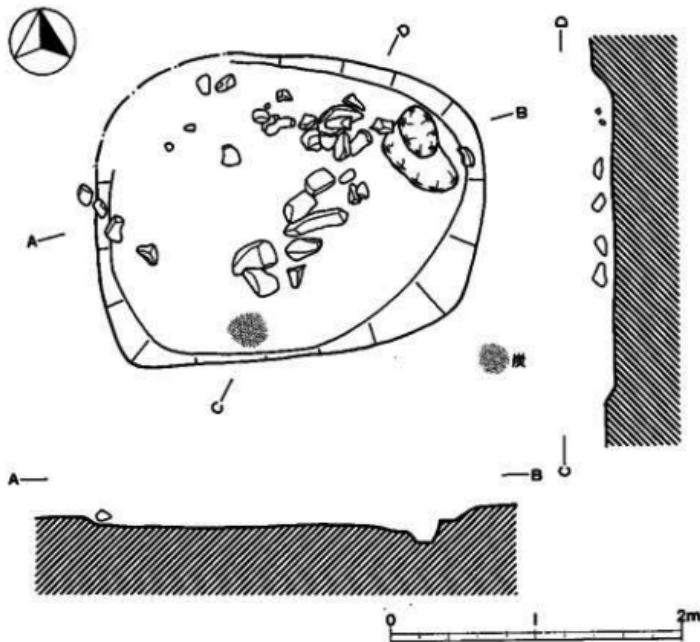
南壁近くに焼土を確認したもののカマドは検出されなかった。また柱穴と思われるものの検出もない。本住居址は簡易的な住居であると思われる。

本址は12~13世紀と思われる。

（中野実佐雄）

遺物（第12図） 本址出土の遺物は、第12図に示した須恵器1点のみである。口縁部の破片で、口縁部形態から鉢形を呈するものと推定され、口縁部に片口の付く、いわば片口付鉢である。口径38.5cm、現存高9cm。胴部内面にアテガタの痕跡がみられ、外面はナデている。胎土には長石、砂粒を含み、色調は、灰色で、焼成は良い。12世紀から13世紀にかけてのものと考えられる。

（小林康男）



第10図 第1号住居址

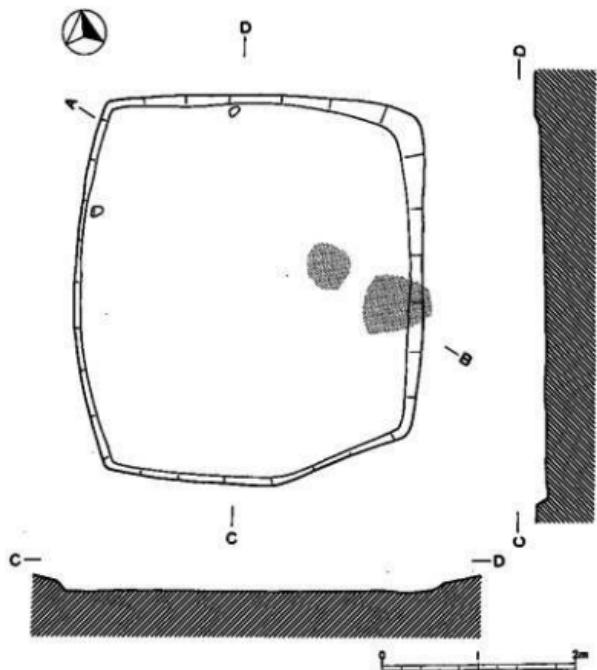
## (2) 第2号住居址

**調査経過** 本住居址は発掘区の北側中央に位置し、第1号住居址の北、第3号住居址の東側にある。本住居址は、第1号住居址検出中に、その北側に接して方形の落ち込みが発見されたが、重機による検出の際の破壊が多く、遺構の状態は悪かった。

**遺構（第11図）** 本住居址は南北に4.0m、東西に3.6mのやや南北に長い隅丸方形を呈する。また主軸はほぼ南北線上に一致する。壁は全体的に軟弱で保存状態が悪い。壁高は北東の隅部で30cmであったが、その他は東18cm、南5cm、西10cm、北10cmと全体的に低くなっている。床面は起伏が見られず平坦であるが、西から東に向けて傾斜しており、東西約10cmの比高がある。床面の状態は全体に軟弱である。周溝、柱穴と思われる遺構は確認されなかった。カマドは確認されなかったが、東壁中央部付近に55cm×70cmの範囲で焼土を検出したため東壁中央にカマドが構築されていたものと思われる。また、カマドの北西側40cmの場所に焼土の混入が見られた。

本址は10世紀に比定される。

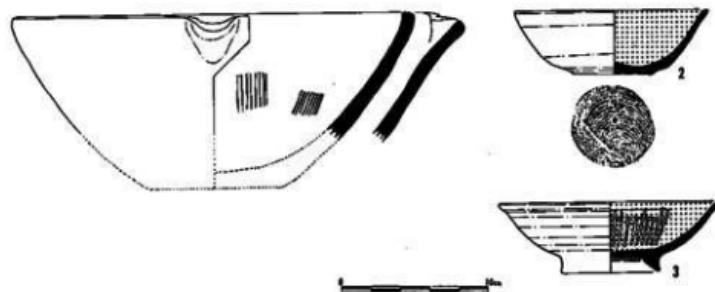
（中野実佐雄）



第11図 第2号住居址

色處理され、暗文が施される。外面の色調は赤褐色を呈し、焼成は良い。これらの出土土器は、  
10世紀に比定される。

(小林康男)

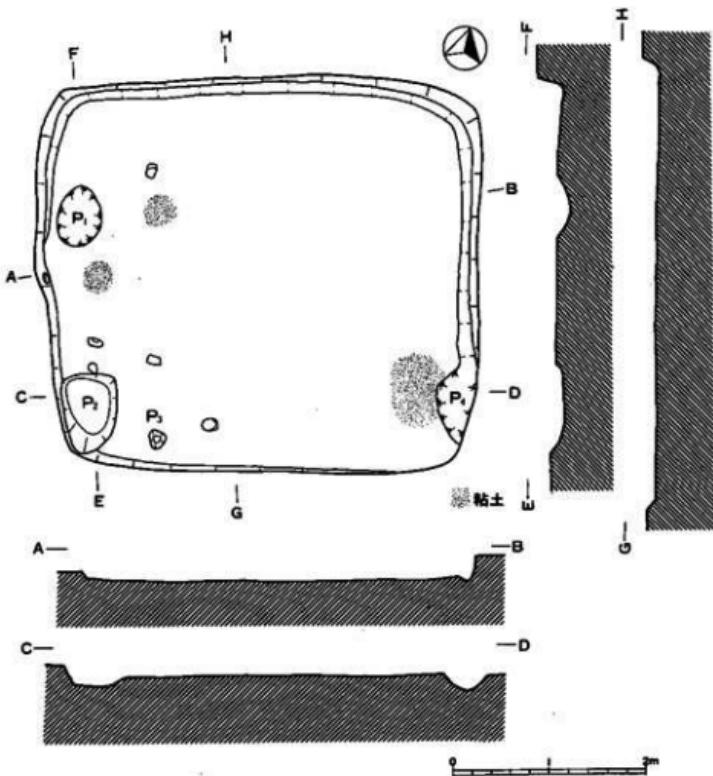


第12図 第1・2号住居址出土土器  
(1、第1号址、2・3、第2号址)

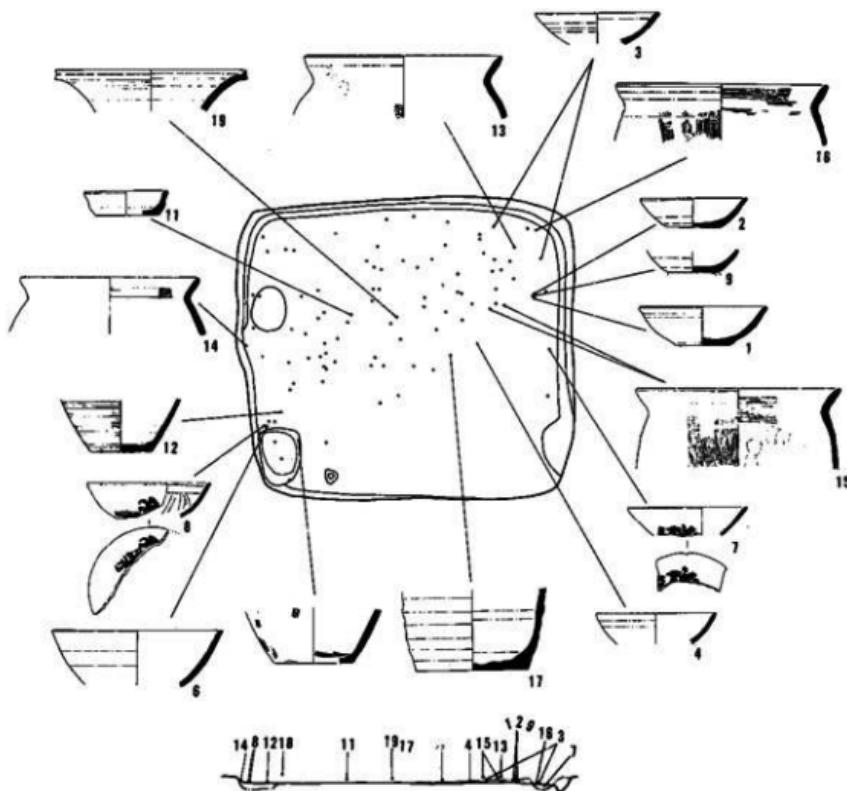
### (3) 第3号住居址

**調査経過** 本址は調査区北西端に位置する。遺跡が松林の中にあったため重機による表土はぎにより遺構上面はかなり搅乱されていたが、本址は最も良好な状態で検出された。10cm程度の薄い覆土であったがローム層への黒色土の落ち込みが明確に検出され、上面からは土師器を中心とする遺物が多く出土した。

**遺構** (第13図) プランは南東コーナーがやや不明瞭であるが、一辺4~4.5mの隅丸方形をしている。壁はほぼ垂直に掘り込まれており南壁を除き明確に存在する。壁高は東・西・北壁が10~20cm、南壁は4cmであり全体的には北に高く、南に向かい漸減していた。床は全体にわたってよく踏みしめられたローム層で、ほぼ水平であった。



第13図 第3号住居址

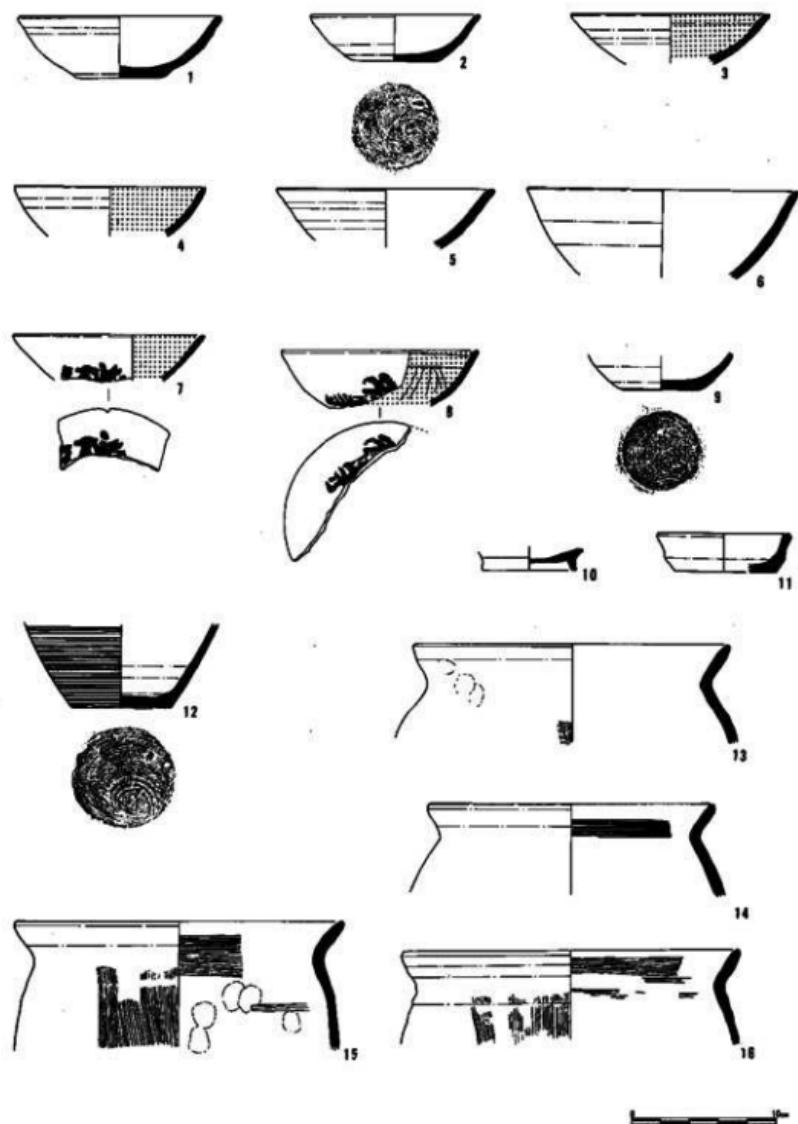


第14図 第3号住居址土器出土状態

また周溝が東、北、西壁でみられた。西壁はカマド付近で途切れていたが、幅5~15cm、深さ3~5cm程度であった。ピットは床面上にP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>がある。P<sub>1</sub>は西壁中央付近に位置し(48×60cm-12cm) グラグラとした掘り込みである。P<sub>2</sub>は西南コーナーに位置し(40×70cm-15cm) 底は平らであった。P<sub>3</sub>はP<sub>2</sub>のやや東にあり(14×20cm-9cm)、P<sub>4</sub>は南東コーナーに位置して(40×70cm-15cm) ダラダラとした落ち込みで、状況から搅乱ではないかと考えられる。なお、柱穴と考えられるものは検出されなかった。

カマドについては、西壁中央付近にあり、壁にくっついた状態で5×10cmの円碟1個の他その東に30×30cmの範囲にわたって白色の粘土が散布し、焼土もわずかながらみられた。カマドに付随するとみられる粘土としては、カマドから1mほど北東に40×30cm、P<sub>4</sub>の西に50×75cmの範囲でみられた。時期は10世紀と考えられる。

(大竹庄司)



第15図 第3号住居址出土土器(その1)



第16図 第3号住居址出土土器(その2)

**遺物 (第15・16図)** 本址からは、土師器、須恵器が出土している。量的には、第4号住居址とともに今回の調査中最も豊富な住居であった。須恵器は図示したもの程度で極めて少ない。1～10が土師器杯、12が土師器小形甕、13～18が土師器甕で、11が須恵器杯、19が須恵器甕の口縁部である。

1～3は、丸味をもった体部に、外反気味の口縁部を有し、ともにロクロ成形痕を残す。1、2は、底面に回転糸切り痕を残し、3は内面を黒色処理している。4～8は、体部が丸味をおび、口縁がやや内側気味となるもので、やはりロクロ成形痕を有する。全て内面黒色処理が施され、8には明瞭な暗文が、また7には不明瞭ながらも暗文らしきものが認められる。7、8には、体部外面に墨書きがみられる。ともに横方向に記されており、8は、「○○寺」と最後の文字は「寺」と判別できるが、残念ながらそれ以前の文字は判読できない。7は全く判読不能であるが、単一の文字ではなく、複数の文字が記されていることだけは観察できる。両者とも黄褐色を呈し、焼成は良好である。9、10は口縁を欠き、10には高台が付され、ともに回転糸切り痕がみられる。

12は、小形甕の胴下半部の破片で、底面に回転糸切り痕を、胴部外面には明瞭なロクロ成形痕を残している。暗い黄褐色を呈し、焼成は良い。13～16は甕の上半部である。いずれも口縁部外面はロクロを用いて成形し、14～16は口縁内面をロクロの回転を用いた横位のハケメで整形し、15は胴部内面に指のオサエによる整形痕が顕著である。13、15、16には、胴部外面に縫のハケメがみられ、13は口唇部を強く面取りしている。これらの甕はいずれも暗褐色を呈し、焼成は良い。17、18は甕の胴下半部である。17は、底面に粗い回転糸切り痕を残し、胴部は内外面ともロクロ成形の痕が顕しい。環状土器集積遺構から出土した甕と類似しており、両者の関連が注意される。ただ、環状土器集積遺構出土のものが全て黄褐色を呈しているのに対し、17は暗褐色を示しており、色調において差が認められる。18は、外面にハケメの痕跡が残されている。

須恵器は、杯と甕がある。11は、口径9.3、器高2.6cmの小さな杯で、体部中央にロクロ成形時の屈折が特徴的にみられ、口唇部は肥厚する。灰白色で、焼成は良い。19は、口径21.3cmの甕の口縁で、胎土に小石が混入し、円面にはヒビ割れが著しい。

本址出土の土器類は、10世紀に比定されよう。

(小林 康男)

#### (4) 第4号住居址

**調査経過** 本址は調査区の最南東に位置する。重機により表土及び根株を取り除かれると、後に住居址中央に位置することになる根株の周りにローム層への黒色土の落ち込みが確認された。さらに表面検出により北側に小豎穴2つを伴う方形の遺構であることが判明した。掘り下げは住居址中央に位置する根株を取り除きながら進められた。掘り込みは南西部分がしっかりとしている程度で、ところどころ根株による擾乱がみられた。床はローム面を使っており、中央部分に非常に堅緻な部分があり、それを追うかたちで調査を進め精査した。

**遺構** (17図) プランは東西4.5m、南北3.8mのやや歪んだ方形を呈して、主軸は東西方向を指す。壁はローム層をほぼ垂直に掘り込んでいる。壁高は、東壁で9~20cm、南壁で6~18cm、西壁で18~21cm、北壁で15cmとなっている。床はローム面をそのまま用いており、P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>、カマドで囲まれる部分が特に堅緻である。全体的に平坦であるが、南東隅が他と比べて少し低くなっている。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>まで確認された。P<sub>1</sub>は2段構造で70×90cm-11cm、30×30cm-24cmとなっている。P<sub>2</sub>は小豎穴第21号(120×95cm-27)と重複しているため大きさははっきりしないが土器片が1点出土している、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>(65×55cm、-30cm)及び南東隅が低くなっていることから、4本の主柱をもつと考えられる。

本址に付随する施設としてカマドと周溝がある。カマドは東壁中央よりやや南に位置し、壁より少し離れて石組み粘土カマドが存在した。石組は根株のためにかなり崩れしており、大きさははっきりしない。焼土は1.4×0.7mの範囲で抜がっており、焼土の抜がりの北側部分に0.4×0.4mの範囲で特に焼土が多く見られる部分があることから、この部分がカマドの炎口であったと考えられる。周溝は、南壁添いに幅18cm、長さ2.3m、深さ3cmのものと、北壁添いに幅16cm、長さ1.5m、深さ6cmのものが見られた。

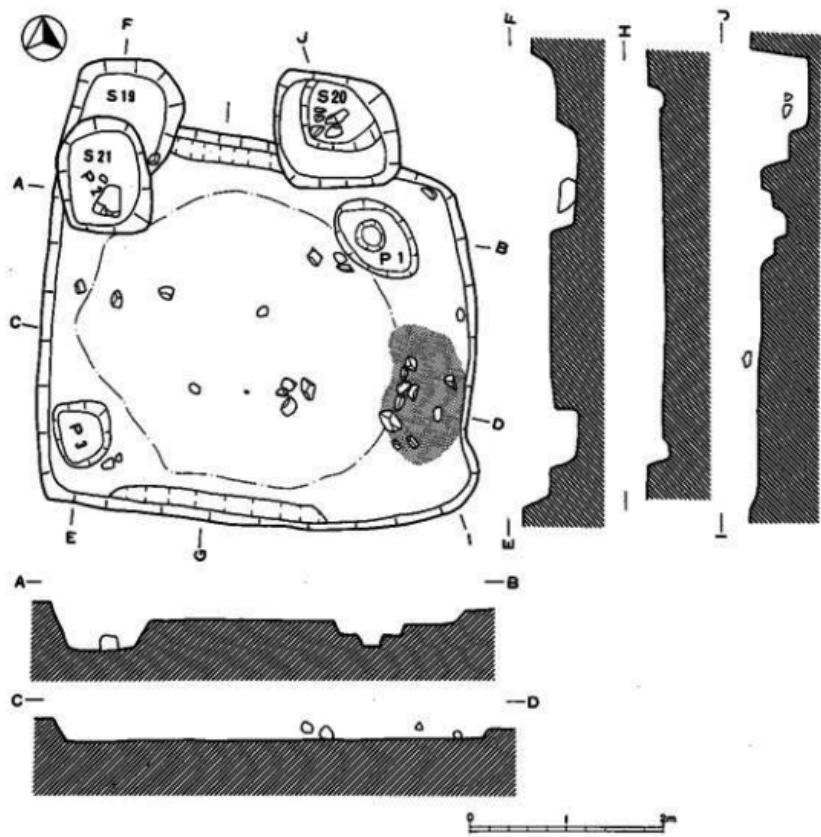
本址と第19・20・21号小豎穴の関係は住居址が古く第19・20・21号小豎穴が新しい。

出土遺物の様相から本址は11~12世紀に属する。

(小島 秀典)

**遺物** (第19図) 本址出土遺物は土器のみで、土師器、灰釉陶器、縁釉陶器が出土している。出土状態は、第18図に示すごとく、カマド周辺および焼土付近を主としている。

土師器1~3は、ともにロクロ成形痕を残し、2・3はその痕跡が顕著である。1は、体部外面に墨書き、内面には暗文が施されている。墨書きは、横書きで、「○色寺」と判読でき、第3号住居址から出土した「○○寺」の墨書きとともに貴重な資料である。底面には回転糸切り痕を残し、黄褐色を呈した焼成良好な杯である。10~12は、川上元氏の言う(川上元「土師系茶器の展開と終焉」1978)足高台付杯である。高台部が薄くて長く、11は高台端部が外に張り出し気味に、また12は内反り気味になり、10、11とも口縁部がゆるやかに外反するものである。土師器17は、胴下半部の破片で、内面に輪積痕を、外面上にハケメを残す。赤褐色で、焼成は良い。18は、土師器の羽釜で、口径21.9cm、現在高7.5cm

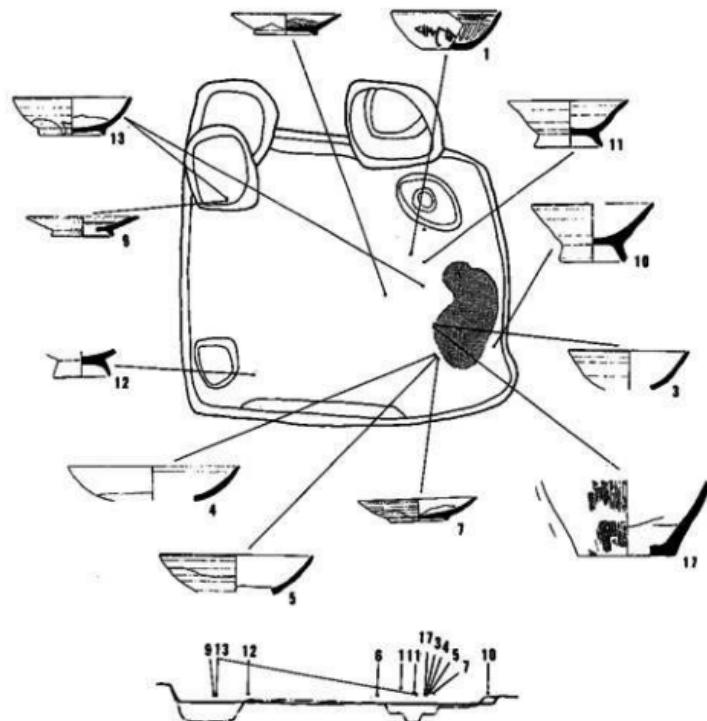


第17図 第4号住居址・第19~21号小窓穴

を削る。内外面ともハケメ整形し、胎土に砂粒を含み、暗黄褐色で、焼成は良い。

灰釉陶器杯 4、5、13は、内寄気味に立ち上がり、ロクロナデされ、13は底部を回転ヘラケズリしている。灰釉陶器 6は、内面に段をもつ段皿で、口径12.2cm、器高2.3cm。皿7・8は、低い高台を付し、7は底部および体部下間に回転ヘラケズリを施し、8は底部に回転糸切り痕を残す。14~16は、灰釉陶器の椀で、薄く長い高台が、やや内寄気味に付される。14は体部を回転ヘラケズリし、16は底部を回転糸切り後ロクロナデしている。15は内面に黒色の付着物が認められる。

本址の出土土器は、11世紀後半から12世紀に比定されるものである。 (小林 康男)



第18図 第4号住居址土器出土状態



第19図 第4号住居址出土土器

## (5) 第5号住居址

**調査経過** 本址は調査地区内のやや西より、第1号、第2号住居址の南に位置する。調査当初は落ち込みが広範囲にわたっているため複数の住居址の複合と考えられたが、その後の調査で、長軸10.2m×短軸9.4mの大型住居址であることが判明した。一部切り株により調査不能な所があったが、ほぼ全容を把握することができた。北壁と南壁の一部が土塙により切られている。

**遺構** (第20図) プランはほぼ短長方形を呈し、主軸を東西方向にとる。壁は軟弱でしっかりしていない。北壁で約20cm、南壁で約11cm、東壁で約13cm、西壁で10cm程の掘り込みを有す。主柱穴は、P<sub>1</sub> (64cm×48cm、深さ46cm)、P<sub>2</sub> (68cm×60cm、深さ46cm)、P<sub>3</sub> (60cm×54cm、深さ56cm)、P<sub>4</sub> (80cm×64cm、深さ40cm) の4本である。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>間4.0m、P<sub>2</sub>～P<sub>4</sub>間4.8mで、柱穴の配列はわずかに台形を呈す。床面の状態は非常に軟弱である。

カマド等の施設はみつからなかったが、住居址西壁付近中央にかなりの焼土塊が検出された。

出土遺物は須恵器壺蓋などが発見されたが、いずれも細片である。住居の規模の割に出土遺物が少ない。本址の属する時期は決し難いが、一応平安期初頭と考えたい。 (石上 周蔵)

**遺物** 本址からは、土師器、須恵器が出土している。全て覆土中からの出土である。量的には土師器が多いが、須恵器もかなりの数量みられる。

土師器杯1は、口径13.6cm、器高4.9cm、底径7.2cmを測り、体部外面はロクロナデ、底部はヘラケズリを施し、内面は緻密な暗文が認められる。甲州型杯に類似するものである。2は、体部が直線的に開き、内面に暗文を施す。3・4は、底部の破片で、底部外面に墨書きを施す。3は「五」、4は「生」と判読できる。

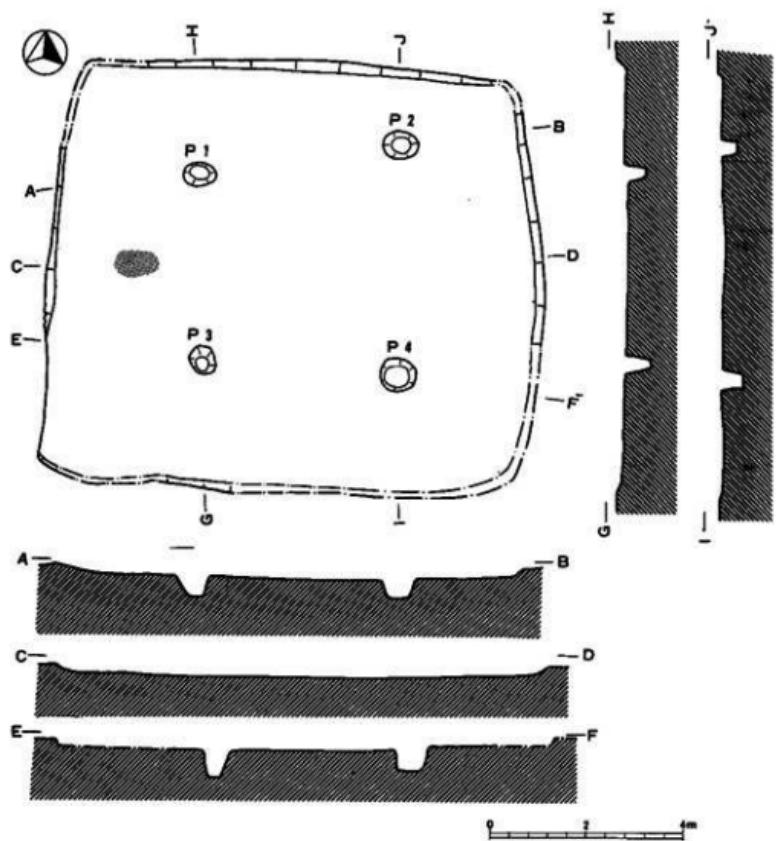
須恵器杯5～9は、内外面にロクロ成形痕を残し、5、6は内唇気味に、7は直線状に開きながら立ち上がる。5、8は回転糸切り痕を有す。ともに灰色で、焼成は堅緻である。10、11は、高台付の杯で、底部は回転ヘラケズリがなされ、体部はロクロ成形が行なわれている。13～15は、杯蓋で、天井部中央は回転ヘラケズリを、端部はロクロナデがなされ、かえりはゆるく内に折れる。ともに焼成は良く、灰白で堅緻である。

16は長頸瓶の胴下半部、17は肩部である。

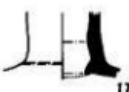
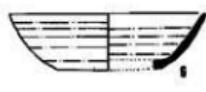
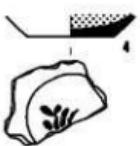
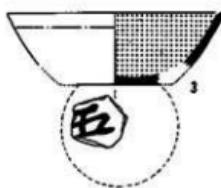
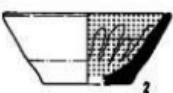
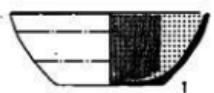
12は、手づくね土器で、内外面にユビナデの痕が、口縁にはキザミが施される。

本址出土土器は9世紀に属する。

(小林 康男)



第20図 第5号住居址



第21図 第5号住居址出土土器

## 第4節 小竪穴

今回の調査では小竪穴は全部で21ヶ所検出された。(第17、22、23図、第4表) そのうち20ヶ所が住居址・環状土器集積遺構と重複している。小竪穴は長方形・方形のものが多く、第1号～16号・第17・18号、第19～21号の3つに大別できる。

第1号～第16号までは第5号住居址と重複するように位置している。第7号を除きすべて底面は平坦で、主軸は南北又は東西をほぼ正確に指す。第5号住居址上面より瓦、第3・4号住居址より寺名を記した墨書き土器、遺構外で青銅製の花瓶が出土している。かなりの時間差(約200年)はあるが、寺の存在から寺に伴う土壤墓の可能性も考えられるが、確証はない。

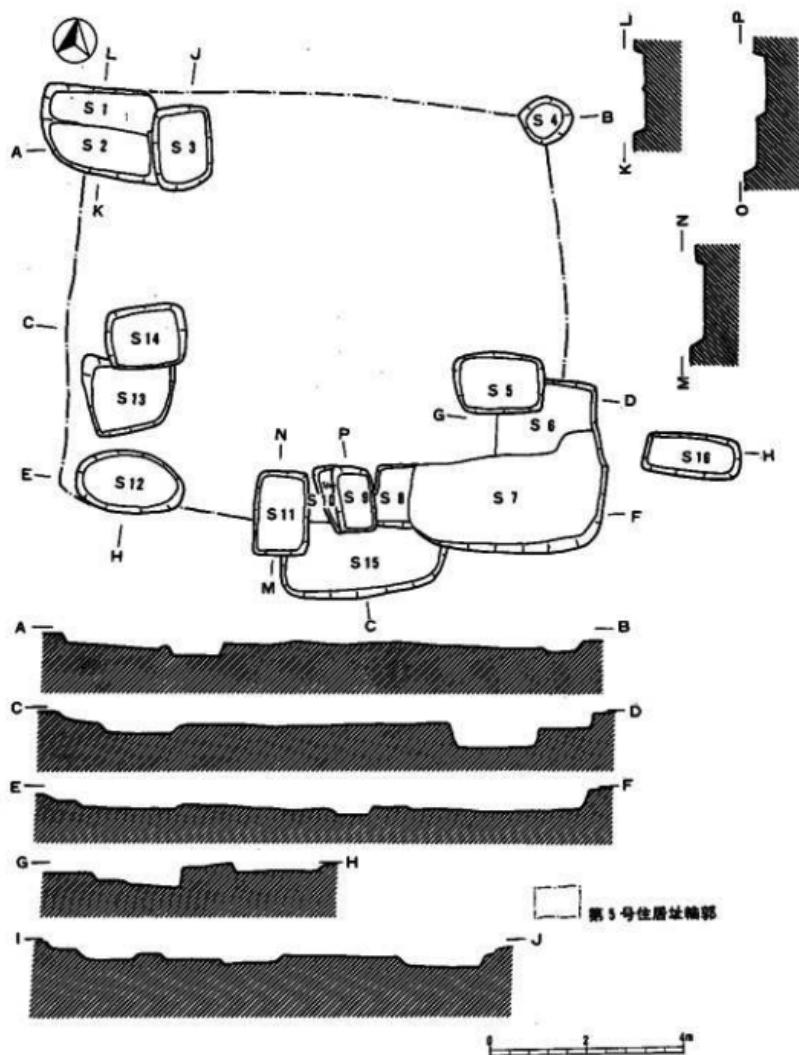
第17・18号は対をなしている。第17号は中央がくぼんでおり、そのくぼみを囲むように數十個の人頭大の石があり、橢円状の空間ができる。第18号は小竪穴内北側に十数個の人頭大の石があり、南西隅にピット(50×60cm、-70cm)がある。さらに第18号の南側3分の1は、環状土器集積遺構の下に位置している。第17・18号と環状土器集積遺構との関係ははっきりしない。

第19・20・21号は、第4号住居址の北側に重複するように位置している。これらは第4号住居址より後に掘り込まれたもので、第19・20号は対をなす。第20号は2段構造(116×116、70×72)で内部に数個の石をもつ。第21号は第4号住居址のP<sub>2</sub>と重複している。底部には人頭大の石がある。また第19号とも重複しているか第19号より新しい。

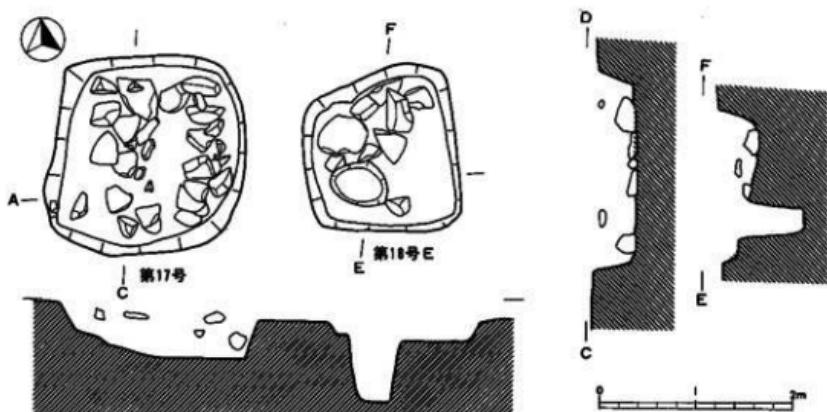
(小嶋 秀典)

第4表 小竪穴一覧表

No	確認面規模	底部規模	平面形	主軸方向	底面	深さ	その他の
1	80×240cm	70×218	長方形	東西	平坦	-20cm	土壤墓と推定される。SHと重複。
2	90×240	888×200	*	*	*	-20	*
3	120×170	100×140	*	南北	*	-24	*
4	95×95	74×68	円形	?	*	-25	*
5	125×175	102×160	長方形	東西	*	-55	*
6	150×204	140×190	不整形	?	*	-32	*
7	225×400	216×390	不整長方形	東西	凹凸あり	不明	2~3個の小竪穴が重複しているものと思われる。SHと重複。
8	94×120	84×108	長方形	南北	*	-5	土壤墓と推定される。
9	80×130	60×112	*	*	*	-21	*
10	?×140	?×125	*	*	*	不明	*
11	110×174	92×150	*	*	*	-24	*
12	130×226	102×196	椭円形	東西	*	-14	*
13	150×180	128×160	不整形	*	*	-10	*
14	125×158	108×140	長方形	*	*	-15	*
15	?×335	?×314	不整長方形	*	*	-22	*
16	90×200	70×186	長方形	*	*	15	SH近く
17	197×202	178×182	方形	南北	央に凹	-42	凹をとり囲むように人頭大前後の右か33個出土、18号と対をなす。
18	157×165	137×146	*	*	*	-36	南西隅にピット(50×60、70)をもち人頭大の石9個出土、南側上面に環状土器集積遺構が重複。
19	113×	85×	*	*	*	-28	21号と重複、20号と対をなすと思われる。4Hと重複。
20	116×116	97×100	*	*	*	-60	2段構造(70×72)になっている。こぶし大の石5個出土。19号と対をなすと思われる。4Hと重複。
21	95×120	75×97	長方形	*	*	-50	4Hのピット(P <sub>2</sub> )と重複、底部に人頭大の石1個あり。



第22図 第1号～第16号小豎穴



第23図 第17・18号小堅穴

## 第5節 環状土器集積遺構

**調査経過** 本遺構は調査地区の北東側、4号住居址の北西方向に位置し、この環状土器集積の北西側4分の1が18号小堅穴の南側3分の1を覆う形で検出された。調査は松林を払っての作業の為、松の根株が各所に散在し、重機による表土削平も困難を極め、本遺構についても表土削平の際、土器集中箇所を確認したため直ちに人力作業に切り換えたが、擾乱を受けた部分がある。環状の土器集積の環が南東側で切れ土器散在状態が希薄となり外側に流れているのはこの為である。また根株除去の際にも擾乱を受けた部分がある。

先にも述べたように本遺構の土器を取り上げると、その北西側4分の1と重なる形で掘り込みが検出され、ロームを掘り込んだのは1.5m四方の方形の小堅穴18号が検出された。

**遺構** 本遺構はローム上に、東西2.50m、南北2.00mの階円の範囲に、土師器の鉢の破片0.5m程の幅で環状に集積して検出された(第24図)。土師器は掘り込みのないローム平面上に、数cm~十数cmの厚さにわたり集積されており、完形及び実測可能なもので34個体にのぼる。集積は環状をなしているが、これを分けると4ブロックに分けられるのではないかと推定される(第25図)。南東端の土器散在箇所は擾乱を受けているため、I~IVまでのブロックの中に入れなかつたが、おそらくIブロックかIVブロックに含まれる形で集積されていたのであろう。各ブロックの関連性については、第IV章に述べているが、A類~E類が各ブロックに混在し単一の類型のみが多いというような特異性もみられず、4ブロックが規則性を持ち環状に連なっていることから、この遺構の土器は、短い期間に集積されたものであろうと推定される。土器片はかなり散ら



第24図 環状土器集積造構

ばる状態で検出されており（第24図）、数箇所の区画にわたっているものが、あたり、底部が上向きに出土したもののがかなりあることや、復元後も完形となるものが少ないと、遺物が安置されていたとは考えにくく、故意に破壊されたかその場に投棄された可能性が強い。

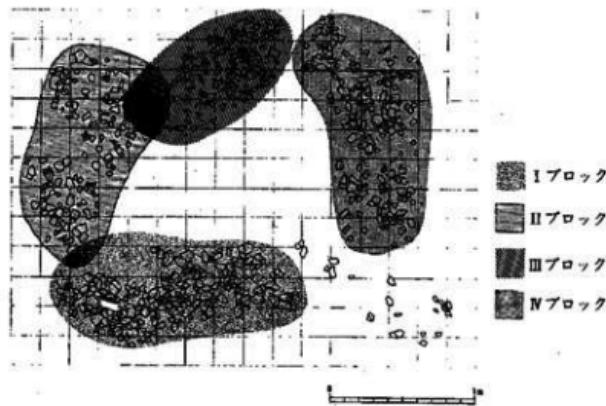
土器集積造構については、県内では同時代（平安末～鎌倉期）の類似造構について確認していないが、古墳時代に長野市駒沢新町、中野市新井大ロフ遺跡の土器集積の類例がある。本造構では前者2例などにおける祭祀的な遺物は無いにしても、かなり祭祀性の強いものではないかとうかがえる。

本造構の北西側の下には第18号小竪穴があったと先述したが（第26図）、この第18号小竪穴は（157×165cm-36cm）のやや歪んだ方形をなし、中には人頭大の礫が9個検出され、南西隅にはピット（50×60cm-70cm）が掘り込まれていた。遺物は上部から土器集積造構の土器片が数点出土したのみで、これだけで土器集積造構との関係は推定し難い。ただし、土器集積造構との重複の関係で、第18号小竪穴はそれと同時期、またはそれ以前のものとは推定される。なお、第18号小竪穴西0.6mの場所には、これと対をなすとみられる方形の第17号小竪穴（197×202cm-42cm）があり、18号と同様、中央くぼみ部分をかこむように人頭大前後の礫が33個みられたが、遺物は出土せず、こちらも土器集積造構との関係は不明確で判然としない。

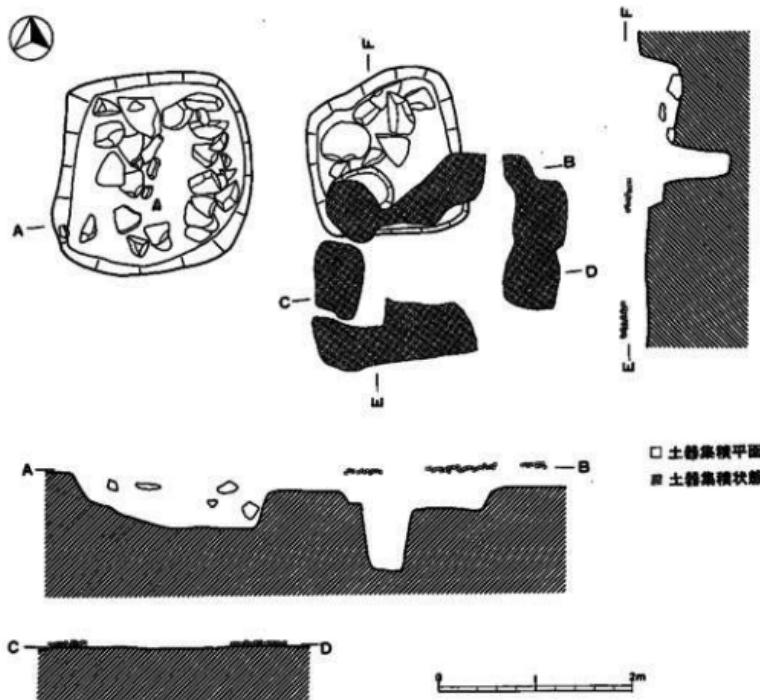
**遺物** 土師器の鉢のみで、復元、実測可能な物だけで34個体出土している。いずれも成形は難で歪みが激しいものもある。色調はすべて明褐色に焼き上げられているが、底部及び胴部には、黒斑が見られるものがある。すべての器体が器面は内外面ともロクロナデで、底部は回転糸切りで仕上げられている。器高はわかるもので（7個体）最低10.2cm、最高14.5cm、口径は最小18.2cm、最大23.6cmで、これから径高指数（注）を計算するの最大a=74.7、最小a=43.4となる。

（前田 清彦）

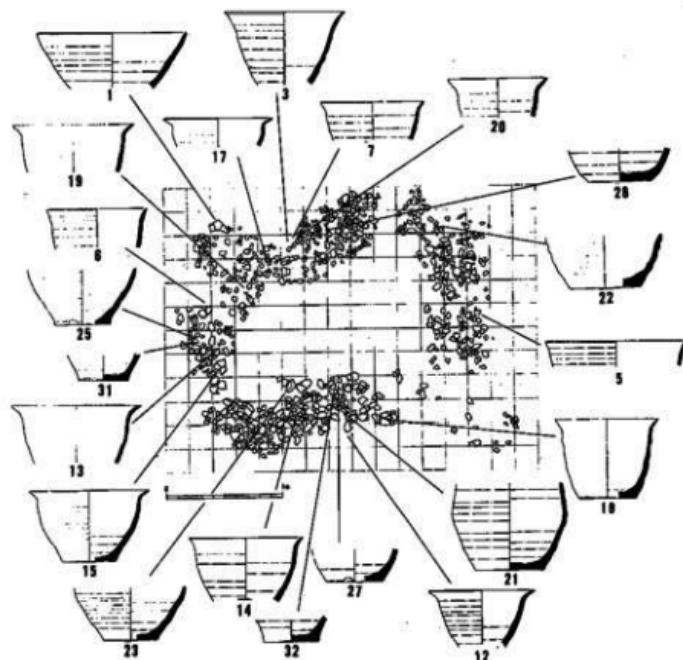
註 径高指数a=器高÷口径×100（平城宮発掘調査報告VI、奈良国立文化財研究所、1978年参考）



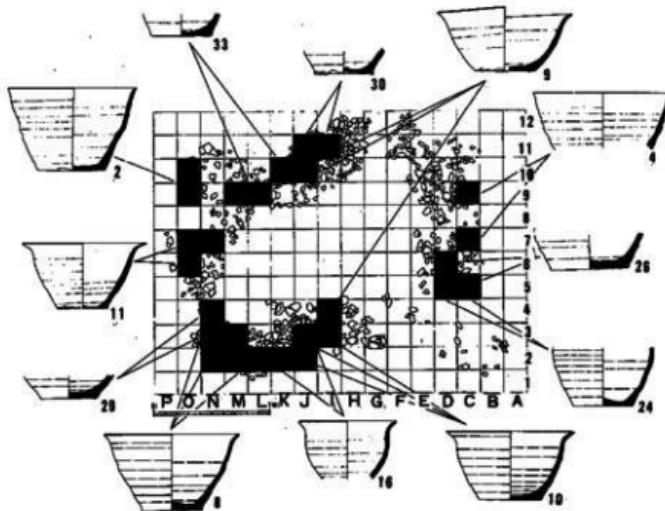
第25図 環状土器集積構造ブロック図



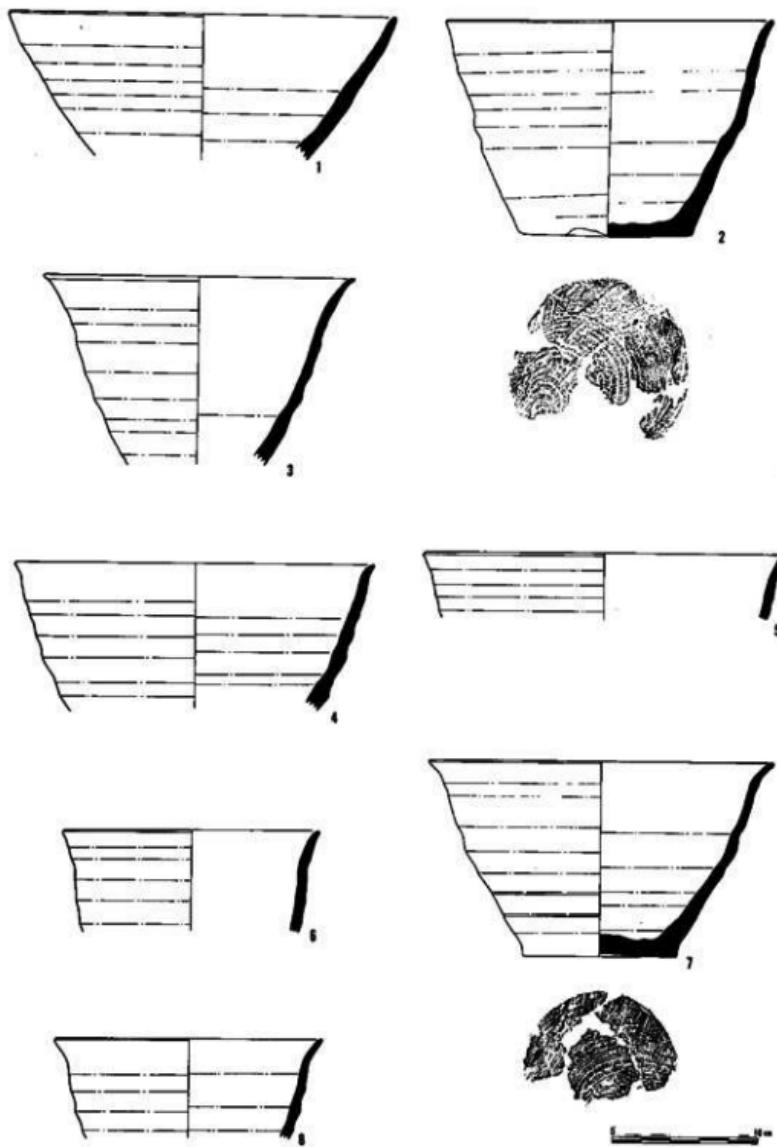
第26図 第17・18号小窪穴と環状土器集積構造との関係



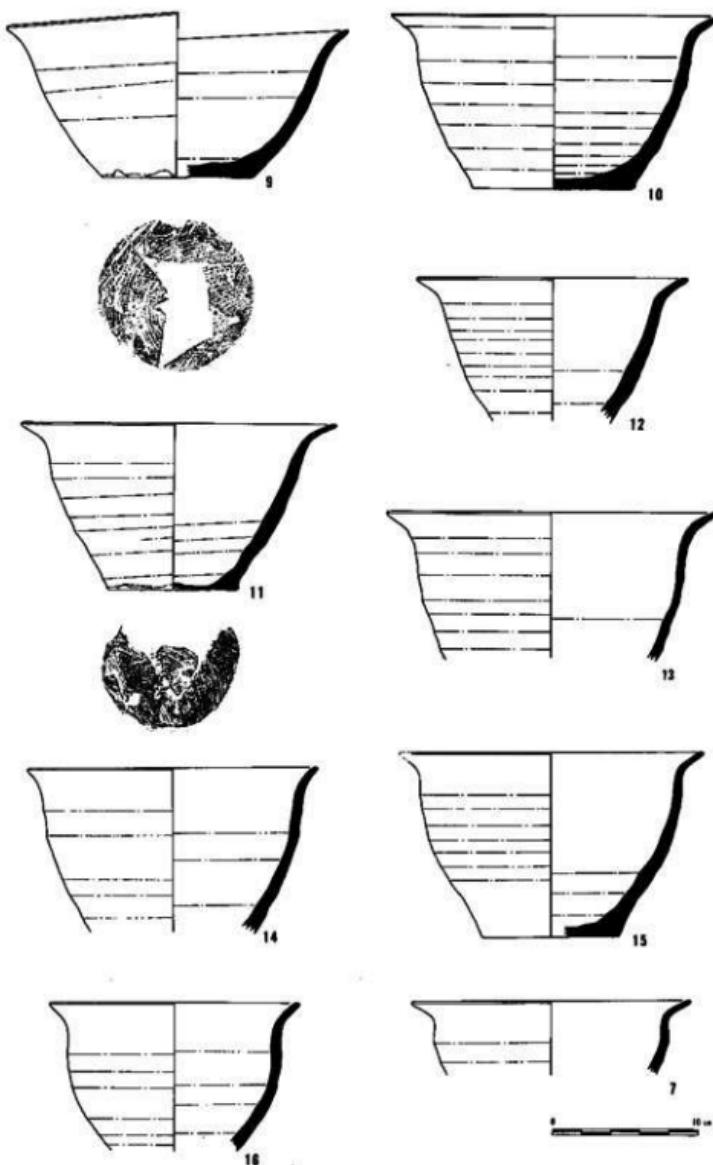
第27図 環状土器集積構土器出土状態図(その1)



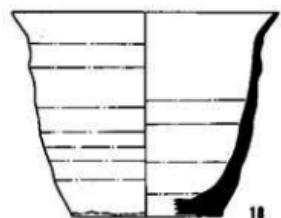
第28図 環状土器集積構土器出土状態図(その2)



第29図 環状土器集積遺構出土土器(その1)



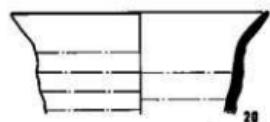
第30図 環状土器集積遺構出土土器(その2)



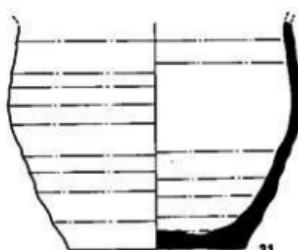
11



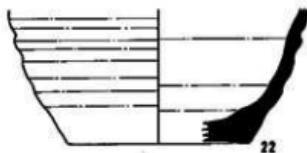
19



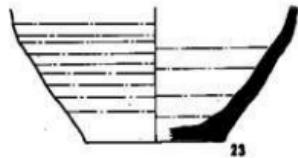
20



21



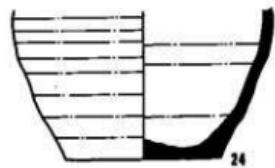
22



23



25

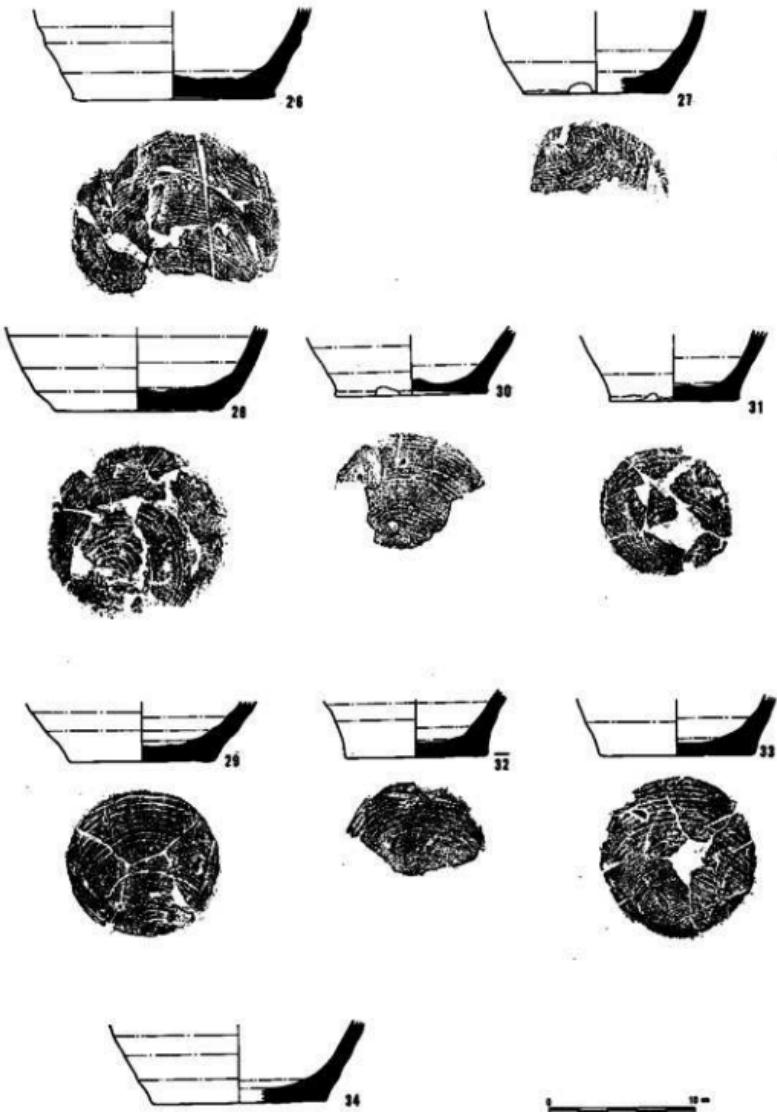


24



6 10mm

第31図 環状土器集積遺構出土土器(その3)



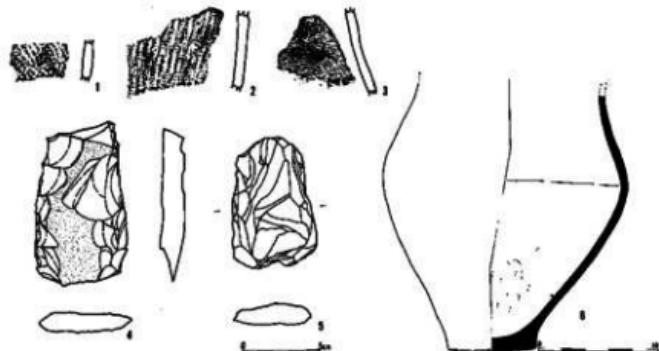
第32図 環状土器集積構造出土土器(その4)

## 第6節 遺構外出土遺物

**縄文時代** 中期に属すると考えられる縄文施文の土器片が、環状土器集積遺構の周辺から出土している（第33図1・2）。また、打製石斧が2点、第5号住居址周辺から得られている（第33図4・5）。4は、珪質粘板岩で、縦8.0、幅5.0、厚さ1.5cmで、短冊形を呈し、5は、頁岩製で、縦10.0、幅5.5、厚さ1.5cmを測り、表面に原石面を大きく残し、側面には磨耗痕を有する短冊形を呈する。縄文時代の遺物は以上のように極めて貧弱である。

**弥生時代** 弥生時代の遺物としては、第33図・6の土器および、図示できない甕形土器片（33図・3）がある。6は口辺部を欠くが、全形を知り得る。現存高23.5、底径7.7、胴部径21cmを測る。器形は最大径が胴部にあり、口縁でやや外反するものと思われる。残存部分には施文されておらず、外面胴部上半にヘラケズリ痕、胴下半にヘラミガキ痕を残し、内面にもヘラケズリ、ヘラミガキ痕が認められる。胎土には、長石、砂粒を含み、色調は赤褐色を呈し、焼成は良い。3は頸部の破片で、5本一組の櫛状工具による波状文が施文されている。砂粒を多く含み、赤褐色で、焼成は良い。3はあるいは、口縁にあたるものかもしれない。これら弥生時代の遺物は、環状土器集積遺構周辺から出土し、方形周溝墓からも近距離にあり、両者の関連性が注意される。

**中世** 第34図は、調査検出中に、第2号と第3号住居址の中間地点で出土したものである。張り出した底部に球形の胴部をなす、胴部から細い頸長の口辺を取りつけた青銅製の慈覚型の花瓶である。底径3.7、胴部径5.3、口辺径1.5cmを測り、口縁部を欠くが、現存高19.1cmの優品である。器厚は1mm前後と非常に薄い。口辺部の中央部、肩の部分、そして胴下半部にそれぞれ両端に沈線を有する隆線がめぐる。密教系の仏具で、経塚、寺院址等から出土することが多いといわ

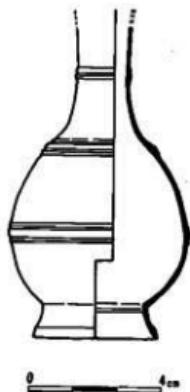


第33図 遺構外出土遺物

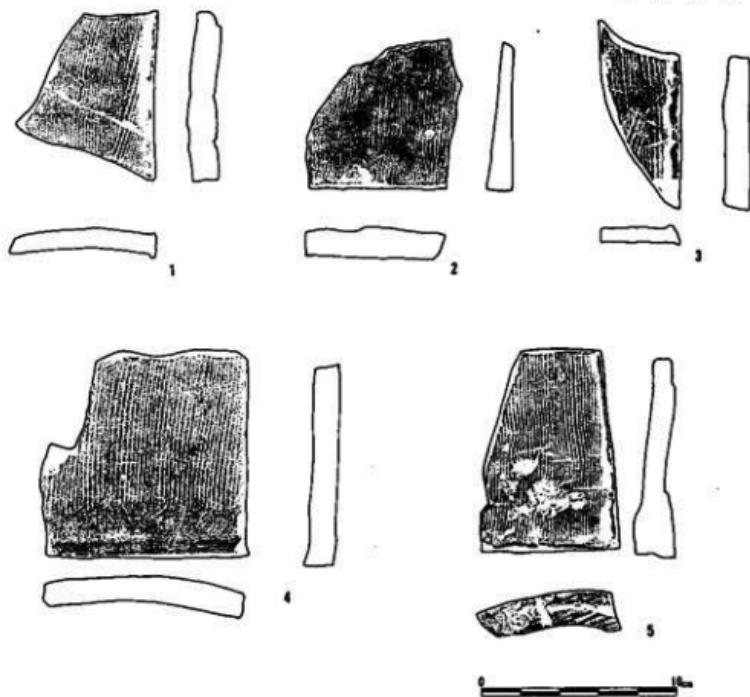
れ、肩の部分が瘦けていることからやや時代は下がり、南北朝時代のものと考えられる。

第35図1～5は瓦片と思われ、表面には刷毛目状の成形痕が顕しく、内面には、成形時の不規則な圧痕が認められる。色調は、灰黒色を呈するものと黄褐色を示すものがある。時代的には、平安時代以前には遡り得ず、また平安時代には寺院に瓦を使用することはまれで、板瓦、檜皮葺が多いことから、平安時代以降となる。また、より後世のものは瓦の製作に木型を使用するために歪みはみられないで、それ程時代的に降ることもない。これらのことから、出土した花瓶との関連性を考えれば、あるいは南北朝時代に比定される可能性が強いといえる。

(小林 康男)



第34図 花瓶



第35図 瓦

## 第Ⅳ章 ま と め

### 第1節 高出遺跡群と水利

本遺跡の属する高出遺跡群に最も課題とされる自然条件は、生活用水として必要な水資源の確保である。段崖直下を流れ、その存立に多大な役割を果していたと考えられる田川との関連性について触れてみる。

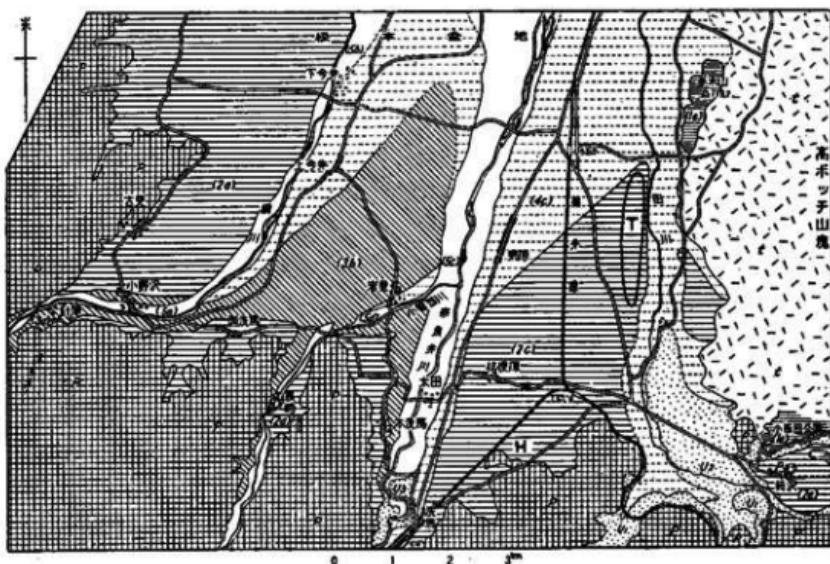
高出遺跡群の立地する桔梗ヶ原台地は、田川、奈良井川の二河川の間に形成された隆起台地であるために地下水位が低く水資源に乏しい。このため台地上に確認されている主な遺跡としては本遺跡群と平出遺跡を数えるに過ぎず、現在の住宅密度から考えると極端に少ないので特徴である。

このうち平出遺跡に関しては、すでに「平出」1955、「史跡平出遺跡」1982等の中で検討されているとおり、湧出する平出の泉とそこから流下する渋川が集落を発生させ、更に集落の範囲を限定させるに至り、それこれまで約2kmと距離を隔てる田川、奈良井川の二河川の恩恵は全く被っていないといえよう。

これに対し高出遺跡群には、立地する台地上に飲用水、灌漑用水といった生活用水を満たすだけの水資源はこれといって見当たらず、田川の流水および段崖直下に湧出する泉（桜清水など）に依存しなければならない。換言すれば高出遺跡群には、田川が必要不可欠な存在になっていたといつても決して過言ではない。従って高出遺跡群の分布を拾っていくと例外なく段丘東縁沿いに南北に延びており、段崖から最も離れた遺跡でさえ300mを測らない。一つの流れが育てた文化的足跡を簡単に追ってみよう。

高出遺跡群とは塩尻市広丘高出と同野村の両地籍にまたがり、田川の左岸段丘上、所謂桔梗ヶ原面の東縁に沿って帯状に南北に延びる遺跡群をいい、旧石器時代から平安時代の多期にわたっている。主な遺跡を拾ってみると丘中学校敷地、丘中学校南、黒崖、北原、一夜窪、北海道、古屋敷、分教場西、上村、裏ノ原、社宮寺、渋沢、五郎次郎、和手などに細分された遺跡が挙げられる。

縄文時代の遺跡については、当時の生活基盤である狩猟、採集の観点から観れば、遺跡の立地する台地上は充分その期待にそう自然環境であったと推測される。従って単に飲用水の運搬が可能な距離として段丘縁立地という解釈が容易にされよう。むしろここで特に問題となるのは定住栽培を生活基盤とする弥生時代以降の存立条件である。前述したように台地上は地下水位が低く



第36図 段丘面区分図（「塩尻」地質図幅説明書より）  
 T:高出遺跡群 H:平出遺跡 t:崖錐性堆積層 P:古生層  
 (1a)~(5b):段丘面 番号は第5表と同様 u<sub>1</sub>:(1)~(2c)に相当  
 u<sub>2</sub>:(2d)~(4c)に相当 u<sub>3</sub>:(4d)~(5c)に相当

第36図 段丘面区分図（「塩尻」地質図幅説明書より）

第5表 段丘面群の分類（「塩尻」地質図幅説明書より）

ロームと地形	標準区分*	鈴川		奈良井川	小曾部川	塩尻東部
		上流部	下流部			
A II	(5)	押出面 (はんらん面)	小野沢面 (5a)	今井面 (5b)	太田面 (5c)	岩垂面 (5d)
A I	(4)	上海模面			郷原面 (4c)	
Dullb	(3)	森口面	針尾面 (3a)	今井原面 (3b)		
Dulla	(2)	波多面	古見面 (2a)	桔梗ヶ原面 (2c)	長崎面 (2d)	柿沢面 (2e)
O	(1)					小坂田面 (ie)

\*(1)は塩尻東部、(2)~(5)は鈴川流域における区分

水源にも乏しいため、当時の耕作は灌漑技術から想定しても予想し難い。現に戦前まではこの付近一帯、赤松林とススキの生い茂る荒地であったという。古代の耕作地は必然と台地下、即ち、より田川側の面に絞られてくる。

田川沿岸は松本平における弥生遺跡の密集地帯の1つである。高出遺跡群の中でも黒崖、北原、一夜窪、裏ノ原、社宮寺遺跡がこれにあたり、更に対岸右岸にも中島（堀ノ内・棧敷）、上木戸（南熊井）などの諸遺跡が分布している。

第36図および第5表はこの付近の段丘面の分布を示したものである。2Cと示されている横実線部分が桔梗ヶ原面であり、北隣りの4Cと示されている横破線部分が郷原面にあたる。現在の土地利用でも水田耕作はこの郷原面が主体となっているが、おもしろいことに中島、上木戸などの弥生遺跡をプロットしていくと田川沿いに張り出すテラス状の中位段丘面（郷原面に相当）に立地しており、また高出遺跡群の上記諸遺跡も立地は桔梗ヶ原面上であるが、下位の沖積氾濫原面との間に中位段丘面が1クッションを置いている地域に位置している。当時の田川が比較的安定した平穏な流れであったことは中島遺跡（1980）の中でも推測されてはいるが、北流に伴ない右岸の片丘から開析流下してくる各支流による出水は著しいものであったと考えられる（羽屋敷1982）。この点について本遺跡から興味ある事実が引き出された。

第6表は本遺跡の1号住、および2基の小豎穴から出土した礫の石質鑑定表である。東山から善知鳥崎にかけての田川後背地に分布し、田川の流れによって近くまで運搬されてきた岩石が主体をなすが、例外として混入する閃緑岩類の存在が目を引く。これは本遺跡の東方から北東方向にかけての山麓中に分布する貫入岩体である。特に小豎穴出土のものは人頭大以上の巨礫であり、目的はどうあれ人為的な搬入は想像を絶する。おそらく土石流か泥流のような搬入過程を経て、付近まで運ばれてきたものであろう。

これらの情況から次のことが推定される。即ち、灌漑技術にまだ乏しい当時にとて、氾濫原を耕作地に利用することは困難であり、必然的に1段高い面（比高差1~2m）を利用するに至ったのではないだろうか。従って田川水系の中で、流れの向きを北流にかえる棧敷付近から丘中学校東方の東西橋付近で沖積地へ流れ出すまでの範囲、即ち田川が桔梗ヶ原台地に沿って流れる範囲については、わずかに残された中位段丘面の存在が水田耕作遺跡の存立に大きく関与していると考えられる。しかし田川沿いの段丘面に関しては前述したように、有名な奈良井川沿いの四段の明瞭な段丘と比較して発達が乏しく、欠陥する部分や存在が確認されても比高差の極めて小さなものが多い。このような地形環境の中で上記のよう

第6表 住居址・小豎穴に伴なう礫の石質分類  
(個数)

種	1号住居址	小豎穴(S17)	小豎穴(S18)
安山岩	2	1	
礫岩	1	1	
粗粒砂岩	2		
中粒砂岩	2	3	1
細粒砂岩	1		
アルコース	1		
石英閃緑岩	1	5	
花崗閃緑岩	1	4	5
片麻岩	1		
石灰岩	1	1	
硬砂岩	12	8	3

な選択性が必ずしもあったかどうかは不明であり、詳細な検証を今後に残される。

田川はこのように高出遺跡群と數100mの隔たり、最高5mもの比高差を持ち、一見何の関係もないさそうに見られがちであるが、実は生活用水の重要な水資源として旧石器時代から平安時代の多期にわたって諸遺跡の発生あるいは立地にまで関与しているのだといつても過言ではないだろう。

(鳥羽 嘉彦)

#### 参考文献

- 1955 井間弘太郎：「平出」 平出遺跡調査会。  
1964 片田正人・磯見博：5万円の1地質図幅「塩尻」、および同説明書、地質調査所。  
1967 藤沢宗平他：「塩尻市高出遺跡とその周辺」、長野県考古学会研究報告1  
1980 塩尻市教育委員会：「中島遺跡」  
1982 塩尻市教育委員会：史跡「平出遺跡」造構確認調査報告書—昭和56年度—。  
1982 塩尻市教育委員会：「男屋敷」 長野県塩尻市男屋敷遺跡発掘調査報告書。

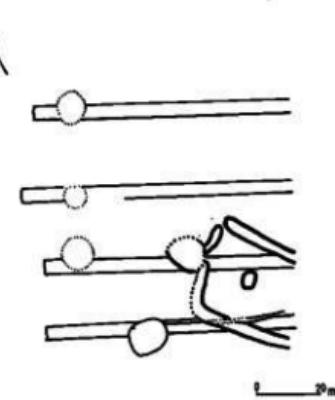
## 第2節 方形周溝墓

### (1) 松本平における方形周溝墓

今回の調査の大きな成果の一つに松本平における確実な例としては最初の発見といえる方形周溝墓の調査をあげることができる。これによって空白地域とされていた松本平も方形周溝墓築造地域に含まれることになった。

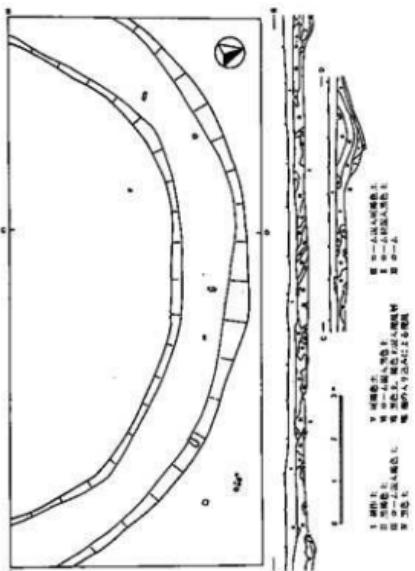
しかし、今回の調査以前にも、発掘調査によつて類似造構が検出・調査されている。すなわち昭和45年、塩尻市上西条に所在する焼町遺跡の発掘調査において、報告書では、「溝状造構」として報告されているものがこれにあたり、図面、説明から把握できる限りでは方形周溝墓と考えられるものである（第37図）。この造構は、溝が「コの字状」を呈し、中央部に小さな方形の竪穴が発見された」というものであり、明らかに南滋賀型ないしは二本松四号型に属する方形周溝墓といえる。

規模は、北溝11m、南溝14m、溝幅1.1~1.5mを測る。主体部はほぼ中央部にあり、東西2.5m、南北3mで、深さ20cm。遺物は、南溝から混入と思わ



第37図 塩尻市焼町遺跡検出方形周溝墓

れる縄文中期土器片が出土しているのみである。この焼町遺跡が調査された昭和40年代中頃は、昭和39年に八王子宇津木遺跡検出の方形周溝墓が弥生時代から古墳時代にかけての墓として認識されてからわずかの日時しか経過しておらず、県内においても飯田市須多ヶ峯、中野市安源寺が調査された程度で、まだこの種の遺構に対する認識が浅い時期であった。こうした状況の中で焼町遺跡も方形周溝墓と断定できなかったのではないかと推測される。事実、その後、調査員の人である宮坂光昭氏は、「方形周溝墓の研究と現状」(宮坂1978)の中で、方形周溝墓の一例として使用している。



第38図 平出遺跡検出円形周溝墓



第39図 平出遺跡円形周溝墓出土遺物

焼町遺跡例のほかに、昭和55年の平出遺跡遺構確認調査において円形周溝墓の一部と考えられる遺構が検出されている(小林1981)。調査目的が遺構確認調査であったため、その1/3ほどを露呈したにとどまったが、溝外周の直径15.5mを測る規模を有するものであった。溝は1.5~1.9m、深さ34~18cmで、幅員は一定の幅を呈するが、深さは一様ではなく起伏が目立つ。主体部は調査区域からは発見できなかった。溝内から土師器甕・高环・須恵器环蓋・瓶・壺の破片が出土している。

以上のように、松本平においては、現在までに方形周溝墓2、円形周溝墓1が発見されていることになる。これらの遺跡は、全て松本平の南半地域の塩尻市にあり、しかも田川上流域に位置

している。同じ田川上流域の塙尻市大門柴宮から出土した銅鐸、そして中流域の北方約7kmの丘陵突端に存する4世紀築造の前方後方墳である弘法山古墳とを結びつけて考えると、弥生時代から古墳時代へという時代の大きな流れが、この田川流域を中心とした小範囲において展開していくことが覗える。

## (2) 長野県内における方形、円形周溝墓

県内における方形、円形周溝墓研究は、昭和39年、飯山市須多ヶ峯遺跡での調査、報告に始まるが、現在まで諸問題を総括的に取り扱った研究は余り多くなく、わずかに宮坂光昭氏の一連の研究（宮坂、1978）があるにすぎない。ここでは、宮坂氏の研究以後の県下の発見例をも集成し、長野県における方形、円形周溝墓の特徴を簡単に触れておきたい。

今回は、短期間の集成であるので遗漏も多いと思われるが、80例が集成できた（表5）。

**分布** 県下における方形・円形周溝墓の分布は、木曾・南北安曇を除き、ほぼ全県下にわたる。中でも天竜川下流域と千曲川下流域に濃密な分布を示す。開発行為の進捗に差がある現在こうした集中性がそのまま分布密度の濃淡を示すか否かは今少し時間を置いた検討が必要と思われるが、両地域とも弥生文化の特に栄えた地域であり、また県下の中でも急速に古墳が築造された地域でもあったことも事実があり、両者間の関連性が重視され、有機的な追求が強く望まれる。

**平面形態** 大塚初重・井上裕之氏の「方形周溝墓の研究」（大塚・井上1969）における7分類17型式を基として、県下の方形、円形周溝墓を分類すると、I類大宮公園型（I-Aと表記）、II類南滋賀型（II-A）、II類二本松四号型（II-B）、II類手王堂山2号型（II-C）、III類二本松二号型（III-A）、III類王山1号型（III-B）、III類二本松一号型（III-C）、IV類朝光寺原7号型（IV）、V類朝光寺原1号型（V）の9形態が知られる（第41図）。これに円形および楕円形を呈するもの、前方後方型のものを加え、以下その在り方をみてみたい。

I-Aは、田村原3、帰牛原1の2例のみで、少なく、天竜川下流域に分布する。II-Aは、帰牛原南原1のみで、少ない。II-Bは、量的に多く、ほぼ全県下に分布し、最も普遍的な形態の1つである。II-Cも量的には多いが、千曲川流域には僅少で、松本、天竜川流域に主として分布する。III-Aは平柴平1のみが知られるにすぎず、III-Bは天竜川流域にみられ、樋口五反田1・2、石子原2、清水9がその例としてあげられる。またIII-Cは、飯田市を中心とした地域に集中して分布し、IVは的場、Vは五輪堂の各1例が存するだけである。このほか前方後方形を呈するものに、昨年相次いで発見された聖川堤防地点、一時坂の2例があり、円形、楕円形はほぼ全県下に分布し、千曲川流域に顕著である。各平面形態には、時期差は顕著には認め難いが、四隅のうち何カ所かに陸橋を有するIII類が弥生後期の前半に多く、陸橋が1カ所となるII類が弥生後半に多くなり、円形、楕円形が弥生後期～古墳初頭に、前方後方が古墳初頭にそれぞれ属し、山岸良二氏の検討結果（山岸1981）とはほぼ一致するようである。

また、山岸氏の言う群別平面形態を検討するには県下の調査例は余りにも貧弱であるが、A独

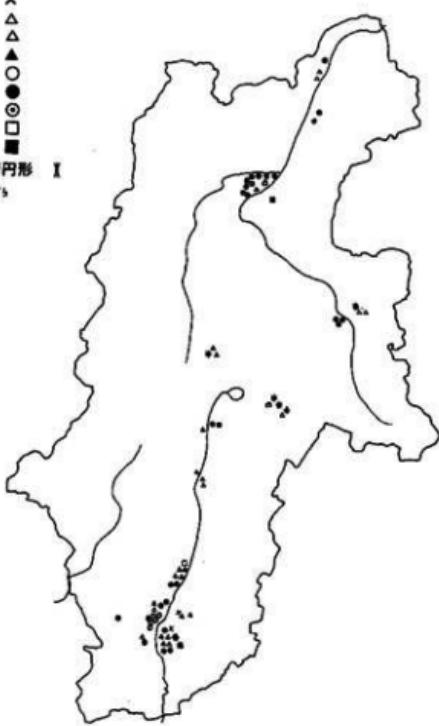
立型には下小平、樋口五反田、丘中学校などが、B群在型には聖川提防地点、畠牛原南原、清水などをその例としてあげることができよう。しかし、両者に時期的前後関係があるのか否かは断定しがたい。

**規模**（第42図）  
5×4mの小形のものから、20×20mのものまであるが、中心は10×10mといえる。平面形態差による規模の大小は余りはっきりしないが、総じてII類がばらつきがあるのに対し、III類はある程度集中性が指摘でき、円・楕円形では径5m前後の小さなものと径15m前後の大きなものとの2分化が看取される。すなわち、弥生後期前半にはある程度の規模の規画性があったものが、時が経るに従いバラツキが生じ、古墳後代初頭には大・小という2形態に分化したといえようか。

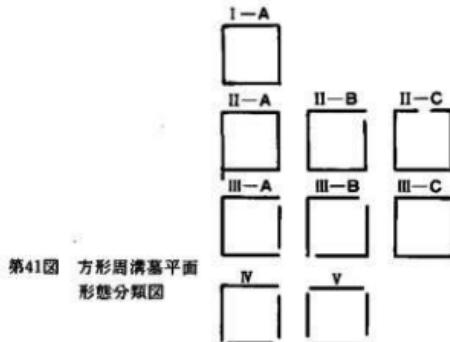
**主体部** 主体部の形態は、隅丸方形、長方形、楕円形、円形、不整形とがある。その大事は隅丸方形ないしは長方形である。長軸1~4m、短軸0.6~2.5mで、2×1.5m程度が平均的な大きさである（第43図）。周溝内での位置は、周溝の主軸を一致して設けられることは少なく、しかも中央

I-A	X
II-A	△
II-B	△
II-C	▲
III-A	○
III-B	●
III-C	◎
IV	□
V	■

円形・楕円形 I  
前方後方



第40図 県内周溝墓分布図

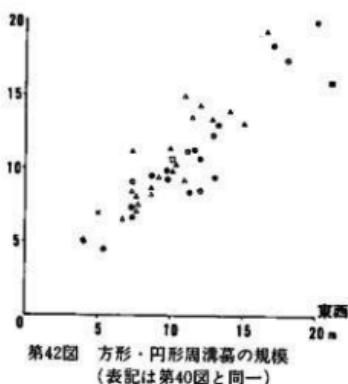


部をはずしていることが目立つ。意識的に主軸方向および中央部を避けたとも考えられ、該期の埋葬觀念を考えるうえで暗示的である。掘り方は、素掘りが最も多く、階段状を呈するものは丘中学校、清水3のわずか2例である。また、主体部の在り方は、大半が1基であるが、帰牛原1、石子原1、3、清水9が2基、さつみが3基を有する。主体部が複数あるものは時間的に逆上の傾向があるとされているが、これらの例は弥生後期前・後半のものを含み、古墳時代までは下らないという程度の指摘は可能であるが、より細かな時期差は抽出できなかった。

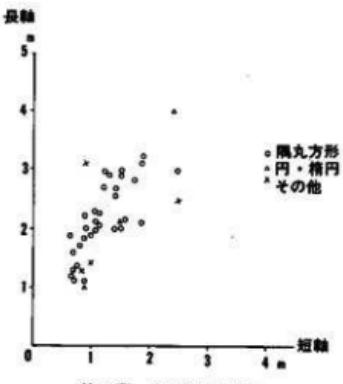
主体部への特別な施設としては、石子原2の「木棺状と思われる板状の木炭」が認められたもの、あるいは周防防塁Bの「円形の土壙に大型の壺を横位に配し」たものなどが知られ、また、丘中学校、滝沢井戻例のように墓底を意識的に盛り上げているものもある。

**副葬品** 主体部に意識的に埋納したものとして、鉄劍、ガラス小玉、管玉、勾玉、鉄劍、鉄製刀子、土器、石鋤、打製石斧等の種類がある。副葬品を所有するものと、所有しないものとの差はかなり顕著なものがある。清水では10基検出されたうち9号のみにガラス玉42個と多量の副葬品が埋納されている。また、副葬品を有する場合、複数の種類を、しかも多量に所持することが目立ち、副葬品のない主体部との差異を一層大きなものとしている。この差異は、被葬者の性格を考えるうえで、今後、大きな手掛りとなろう。

県内の方形周溝墓の特徴を累々列記したが、これらの有する意義については稿を改めて論じてみたいと思っている。



第42図 方形・円形周溝墓の規模  
(表記は第40図と同一)



第43図 主体部の規模

第7表 方形・円形周溝墓一覧表

(典拠文献は省略)

番号	遺跡名	所在地	時期	形態	堤	溝	径	主	体	部	主体部	周溝内出土品	備考	
								幅	規	板				
1	須多ヶ原1号	高崎市	弥生後	II-B(?)	5.1×?	60	10~15	?	圓丸	2.8×1.85 8~22	鐵劍、鉄刀、 骨玉	小刻模、鳥印、 台付鏡、蓋		
2	須多ヶ原2号	高崎市	古墳時代	II-B(?)	5.5×4.8	72~45	20	圓丸長方	3.3×1.9					
3	鹿	高崎市	古墳時代	円形	様25m	3.3~2.2	—					馬蹄、骨、鐵		
4	安西寺22号	中野市	弥生後	—	2.4×2.4	15×20	—	不整形	1.1×0.8、-20	—	無銘劍、如意頭 狀土製品			
5	安西寺23号	中野市	弥生後	長	円形	5×4	30~40	15~45	?	円形	1.3×0.8			
6	道幹小学校	高野市	弥生中	II-C	6.7×6.8	75~140	13~26	9.9	圓丸方舟	1.6×0.7	ヒスイ、蟹玉			
7	森ノ井遺跡群	高野市	古墳時代	—								溝中に骨棺		
8	御嶽山遺跡SD01	高野市	弥生後	円形										
9	御嶽山遺跡SD02	高野市	弥生後	円形										
10	御嶽山遺跡SD03	高野市	弥生後	円形										
11	御嶽山遺跡SD05	高野市	弥生後	方形										
12	御嶽山遺跡SD06	高野市	弥生後	方形										
13	御嶽山遺跡SD02	高野市	古墳後方	古墳後方	—									
14	平衛平1	高野市	古墳時代	II-A										
15	平衛平2	高野市	弥生後	方形										
16	平衛平3	高野市	弥生後	方形										
17	平衛平4	高野市	弥生後	方形										
18	五輪堂	更埴市	古墳時代	V	16×21	50~130								
19	後 沢 1	佐久市前山	—	方形										
20	後 沢 2	佐久市前山	—	方形										
21	後 沢 3	佐久市前山	—	方形										
22	西防衛B	佐久市菅原田	弥生後	円形	4.75×5.40			円形	横2.50	ガス小玉 大型の壺	高环、深鉢、壺	西に砂場		
23	下小平1号	佐久市菅原田	弥生後~古墳初	II-C(?)	11.4×11.2	140~200	7~30	?				壺		
24	下小平2号	佐久市菅原田	古墳初	II-C	16.6×?	135~430	54~121	なし				壺、刀、カノ		
25	丘 中 隅	筑波市広丘	弥生後~古墳初	II-C	13.4×12.9	130~180	19~36	3.3	圓錐	3.11×1.80	鐵劍、刀劍玉			
26	越	筑波市西条	—	II-B	(14)×11	110~150				3.0×2.5、-20				
27	平 出	筑波市宗賀	古墳時代	円形								高环、腹、打序		
28	一時坂1号	筑波市光町	古墳時代	前方後方								壺、鏡		
29	一時坂2号	筑波市光町	古墳	円形(?)									VI-Ba	
30	一時坂3号	筑波市光町	古墳	円形(?)									VI-Ba	
31	本 城	深志市真野町	古墳時代	II-B	13.3×12.5	110~210	39~45	2.8	圓錐	3.1×0.9、-27				
32	本 城	深志市真野町	古墳時代	円形	徑13	140~200	30~75	—	圓錐長方	2.0×0.8	鐵製刀子	石製品、竹筒	南西に砂場	
33	鏡口五反田1	根羽町	弥生後	II-B	18.6×17.0			0.8	圓錐長方	2.9×1.3、-20				
34	鏡口五反田2	根羽町	弥生後	II-B	10.8×12.0			1.9	—	—		骨生土器		
35	良 地	筑波市大原	—	II-B	8.2×7.7	60~100	15~60	1.4	—	—				
36	南 小出 南坂	筑波市西条	—	II-C	8.9×9.0			1.0	—	—				
37	駒ヶ原南1	官田村	弥生後	II-B	7.4×7.8			0.8	長方形	3.0×1.5				
38	駒ヶ原南2	官田村	弥生後	II-B	9.1×11.0			—	圓錐長方	3.0×1.5		鐵石、磨製石旗		
39	的 場 1	松川町	弥生後	W索形	10.8×10.4			—	—	—		高环、打序、 石包丁、砾石	隙縫3 内蔵U字溝	
40	的 場 2	松川町	弥生後	II-C	11.7×10	80~100	30~60	1.3	長方形	2.0×1.4		骨盤、石盤、有 机质灰粉、砾石块		
41	角 田 草 1	高森町	弥生後	II-B	?×14.1			—	—	—				
42	角 田 草 2	高森町	弥生後	II-C	19.4×16.5	95~110	22~50	1.2	圓錐長方	2.6×1.4、-25	石蹠、打序			
43	広 痛	高森町	弥生後	—	9.3×9.0	70~100		1.8	—	2.1×1.5				
44	天 伯 B	高森町	—	II-C(?)	8.4×7.4	50~200	50~130	1.6	—	—				
45	天 伯 A	高森町	弥生後	—	7×14	110~150	160		—	4×2.4、-170				
46	伊 久 間 原 1	楠木村	弥生後	II-B	8.6×8.1	80~110	30~45	1.6	圓錐長方	2.0×0.9		石繩		
47	櫻 牛 堀	楠木村	弥生後	円形	徑7.5			1.5	長方形	1.8×0.9、-25			中腹田号 北に砂場	
48	櫻牛堀南原1	楠木村	弥生後	II-A	11.3×7.3	100~130			圓錐	2.06×1.5、-43		打序、横刃型石器	4.5号と通用	
49	櫻牛堀南原2	楠木村	弥生後	II-C	9.5×9.2	90~150	40		長方形	2.2×1.5、-27		磨石器	4.5号と通用	
50	櫻牛堀南原3	楠木村	弥生後	II-B-C	8.5×11			0.5	圓錐長方	2.2×1.9、-33		磨石器		

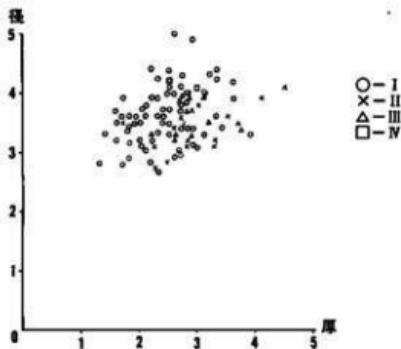
番号	遺跡名	所在地	時期	形態	規模	周溝		主体部 形態 規模	主体部 出土品	周溝内出土品	備考
						巾	溝さ				
51	楊牛原南原4	南木村	弥生後	II-B-C	9.5×9.6	110	—	1.5 楕丸形方 1.05	2.2×1.1,-35	石鏡	3.5号と複数現
52	楊牛原南原5	南木村	弥生後	II-C	9.6×13.0	100~108	—	1.0 楕丸形方	2.3×1.1	土器、打刃	2.4号と複数現
53	楊牛原1	南木村	弥生後	I-A	9.3×9.7	90~120	30~60	楕丸形方 楕円	2.0×1.2,-21~30 1.2×0.9,-25	土器片	
54	楊牛原2	南木村	弥生後	円形	径7.5	70~100	30~60	—	2.1×1.1	西坪片、石斧	随縁あり
55	石子原1	飯田市山本		II-B	14×12.4	100~120	60	1.0 長方形 1.7×0.8,-34	2.7×1.2,-34 ガラス小玉		2号と重複
56	石子原2	飯田市山本		III-B	9.8×10.0	100	60~120	0.6 楕丸形方 0.6	3.0×1.2,-25		1号の複数現
57	石子原3	飯田市山本		?	17×?			—	2.8×1.6,-42 2.6×1.6,-22		
58	清水井戸	飯田市伊賀良	弥生後	III-C	11.3×11.2	90~120	30~60	1.6 楕丸形方	2.3×1.1,-30	鉢刺	
59	椎見空洞	飯田市上郷	弥生後	III-C	12.3×13.2			1.8 長方形 楕円	2.1×1.5,-20	ガラス小玉	
60	きつみ	飯田市上郷	弥生後	III-C	7.0×9.0			1.4 楕圓 楕圓	1.6×1.0,-56 1.2×0.7,-18 1.2×0.8,-22	中島式土器	
61	清水1	飯田市松尾	弥生後	III-C	17.5×18.0	100~120	50~80	1.4			土器
62	清水2	飯田市松尾	弥生後		—	10~12.0	80~120	20~30			多面石室下蓋石類
63	清水3	飯田市松尾	弥生後	III-C	8.3×12.3	80~100	30~45	0.8 楕丸形方	1.6×0.7		工具、鐵刃、石器 内に漆
64	清水4	飯田市松尾	弥生後		33×33	120~250	50~150	—	—		骨、骨竹、高脚
65	清水5	飯田市松尾									
66	清水6	飯田市松尾	弥生後								馬糞、糞、鐵、鐵石類 石丁、有頭狀缺石類
67	清水7	飯田市松尾	弥生後								骨、骨竹、高脚、鉢
68	清水8	飯田市松尾	弥生後	III-B	11.3×11.5	80~120	50~80	1.5 楕丸形方 楕丸形方	1.3×0.8,-20 1.3×0.9,-20	ガラス小玉	骨、馬糞、石器、 石丁、有頭狀缺石類
69	清水9	飯田市松尾	弥生後								
70	宮の先1	飯田市三日月	弥生後	II-C	13×15	120~220	65~95	1.5 楕丸形方	2.7×1.4,-55		土器
71	宮の先2	飯田市三日月	弥生後	II-B,C	7.8×7.1	80~120	30	1.7 楕円	1.4×1.0		
72	宮の先3	飯田市三日月	弥生後	II-B	7.5×7.7	70~90	10	—	1.3×1.1		
73	飯田市中合地	飯田市	弥生後								
74	飯田市中合地外	飯田市	弥生後								
75	飯田市中合地内	飯田市	弥生後								
76	田村原1	豊丘村	弥生後	II-C	10×10			—	—		
77	田村原2	豊丘村	古墳初	II-C	14×14	200~300	20~50			骨、石器、布帛類	
78	田村原3	豊丘村		I-A	6×5	55~140	25	—	—		
79	中原	阿智									
80	名子	松川町									

### (3) 丘中学校遺跡の方形周溝墓

丘中学校遺跡で検出された方形周溝墓が、県内発見の方形周溝墓と如何なる関係があるか考えてみたい。

平面形態は、II類手王堂山2号型に属するが、この型式は主として天竜川流域に分布するものであり、同地域との関連性が推測できる。このことは、柴宮銅鐸も天竜川水系を遡上してもらされたと推定されていることから、松本平南半地では当時の祭祀意識の中により天竜川水系での在り方と結びつきが色濃いことを示しているものと受け取ることができる。

また、規模は13.4×12.9mと、一般的な大きさよりやや大き目であり、主体部も、3.11×1.8mと大きな部類に属する。主体部は、階段状を呈し、県内では清水3に類似が求められるだけで、



第45図 ガラス小玉の大きさ



第44図 ガラス小玉断面図

小玉は、周防畠B、石子原1、権現堂前、清水9にそれぞれ出土している。量的には鉄釧はともに1個であり、ガラス小玉は数点を一般的とし、最多数でも清水9での42個であった。丘中学校では110個と今まで例をみない多量の出土であり、その多量性は注目する必要があろう。また、塩尻市域では、過去2遺跡からガラス玉の出土が報じられている。棟敷遺跡と中島遺跡とである。中島遺跡は弥生後期の第10号住居址床面から1個の出土であったが、棟敷遺跡では、壺中に入っていたと思われる状態で、硬玉、赤チャート、碧玉、水晶製の勾玉、管玉とともにガラス小玉48個を含む総数157点という多量の出土がある（桐原1973）。これら2遺跡は丘中学校遺跡とは同じ田川上流域に位置し、距離的にも近距離にあたる。また時期的にも大した時期差のない頃のものであり、その関連性が注意されよう。

ガラス玉の製作は、弥生中期から我が国でも可能となったといわれている。製法は、「鋳型ではなく、粘土を塗った針金のようなものに熔解したガラスを付着させ、冷却後に針金をぬいてつくった」といわれている（町田1979）。今回出土したガラス小玉を観察してみると、その切断面の形態によって、およそ4つの形態に分類することができる（第44図）。すなわち、I両側辺が平行に切断されているもの、II一方のみが斜めに切断されているもの、III両側辺がともに平行するように斜めに切断されるもの、IV両側辺が各々逆方向に斜めに切断されるものである。この切断面の形態差は、ガラス小玉製作時の切断方法の相違を示しているものといえる。量的には、Iが72で最も多く、IIIが18でこれに次ぎ、IIが12、IVが4と最も少ない。玉の大きさとこれら切断面の形態差には差異は認め難い。

特異な形態といえる。この階段状を呈するものは、古墳時代に入ってから営まれるといわれているが必ずしもそうばかりはいえず、清水3では弥生時代後期となっている。丘中学校の例は、時期を決する遺物が出土していないため明確さを欠くが、付近から弥生後期の土器の出土があることからやはり弥生時代に遡る可能性が指摘できよう。主体部の底面に、粘土ないしはロームの塊を貼付して高く盛り上げた例として、丘中学校のほかに滝沢井戸跡があり、頭部施設として注意される。

副葬品は、鉄釧、ガラス小玉であったが、鉄釧は須多ヶ峯に、ガラス

さて、方形周溝墓の選地には、大塚・井上氏の研究によると6種に分けられるが、丘中学校検出例は、(3)台地上に相当しよう。丘中学校周辺には、第II章歴史的環境にも記述があるように、弥生時代の遺跡としては、住居址が発見されている北ノ原のほか、花見、一夜窟などの諸遺跡がある。台地上に占地する方形周溝墓は、集落に隣接して営まれ、多くの例が台北の先端部に存し、墓域が限定されていた可能性が強いとされている。丘中学校の例も、前記した集落遺跡を背景として、台北末端に営まれたものと考えられる。

(小林 康男)

#### 参考文献

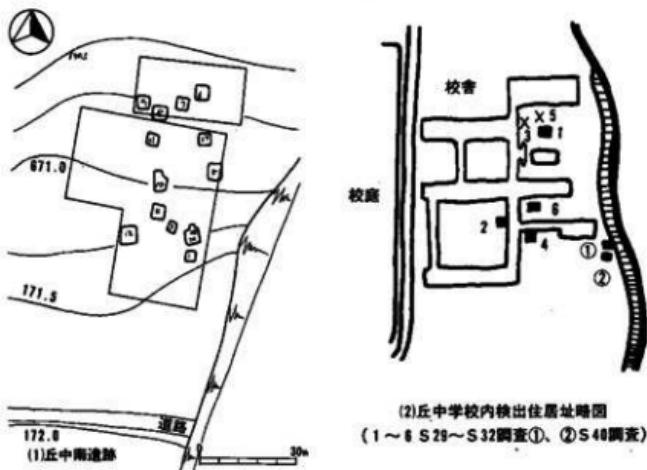
- 大塚初重・井上裕之「方形周溝墓の研究」駿台史学 24 1969  
塩尻市教育委員会「史跡平出遺跡遺構確認調査報告書—昭和55年度」1981  
塩尻市教育委員会「長野県塩尻市焼町遺跡発掘調査報告書」1970  
桐原健「信濃における弥生時代玉のありかたについて」信濃25-4 1973  
町田翠「装身具」日本の原始美術9 1979  
宮坂光昭「方形周溝墓の研究と現状」中部高地の考古学I 1978  
山岸良二「方形周溝墓」考古学ライブラリー8 1981

## 第3節 住居址と小竪穴

### (1) 住居址

まず今回の調査に限って考察を加えれば、第1号住居址と第5号住居址が特徴的である。第1号住居址は $2.7 \times 2.0\text{m}$ のプランで、非常に他の住居址と比べて小形である。このプランだと上部構造を考えてもかなり小さなものとなり、生活住居として使用したとは考えにくい。従って住居址に類似する構造物と考えた方がよい。第5号住居址は $9.0 \times 10.0\text{m}$ の方形のプランで大形住居である。平安時代以前の大形住居は市内遺跡をはじめ各地で検出されているが、平安時代としては非常にめずらしい規模である。大家族が生活をしたと言うより、共同の作業場・集会所的施設と考えた方が無難である。

次に今回の調査と以前の丘中・丘中南遺跡の調査を踏まえて考察を試みたい。今回、以前の丘中・丘中南遺跡で検出された住居址は第5・46図及び第7・8表の通りであり、それぞれの遺跡の位置関係は第47図の通りである。今回の調査地区と以前の丘中・丘中南遺跡の調査範囲でかなりの住居址が検出されているし、今後の調査でも多くの住居址が検出されるものと予想され、この地に一大集落が存在していたと推定できる。この集落の平均的な住居址は一辺 $3.5 \sim 4.5\text{m}$ の方形のプランで、粘土又は石組粘土カマドを東壁・西壁央にもつ住居址が考えられる。さらに周溝・柱穴・ピットも多くの住居址が検出されている。



第46図 丘中南・1965年以前の丘中  
遺跡調査遺構配置図

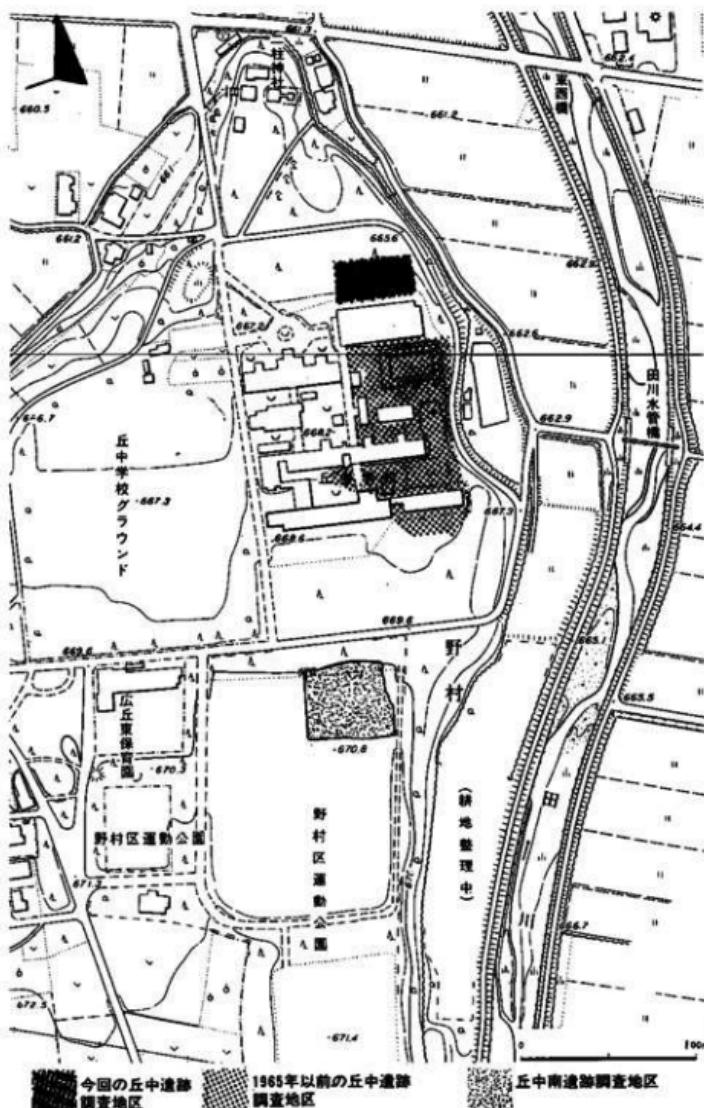
遺物は、この地が良田郷の中心地であったことを強く推定できる土器が出土している。以前の丘中遺跡調査の第6号住居址から「良」を記した墨書き土器、今回の調査で第3・4号住居址から「寺」を記した墨書き土器が出土している。さらに遺構外遺物として、時代的には墨書き土器より約200年新しくなるが、瓦・青銅製の花瓶が出土している。これは寺の存在を強く証明するものである。今回の調査で出土した墨書き土器の寺と同一であるかどうか不明であるが、良田郷に関係した寺であると推定することは、それ程無理ではない。良田郷とは、宗賀平出・塙尻大門・中町・上下西条・棧敷・長畠等と片丘の中挟・北熊井・南熊井・北内田・南内田・広丘の全域・さらに寿の全域を含む範囲で、筑摩郡の六郷の1つである。国府への官道は良田郷内を通っており、覚志の駅もこの郷中にある。寺も内田の牛伏寺や吉田の長谷寺跡などがある。これらから丘中学校を含む高出遺跡群は良田郷に含まれていたことは確実であり、しかも、その中核的な位置にあったことも充分推測できる。

今後は、丘中学校周辺だけでなく、良田郷全範囲内の同時期の遺跡を含めたマクロ的考察が必要である。そして、そろそろミクロ的考察から発展してマクロ的考察を加えてもよい時期にきている。

(小嶋 秀典)

参考文献：原嘉藤他 「東筑摩郡・松本市・塙尻市誌第二卷歴史上（別冊）一原始・古代篇」 1974

藤沢宗平他 「塙尻市高出遺跡とその周辺」 1966



第47図 丘中・丘中南遺跡発掘調査地区図

第8表 丘中学校遺跡住居址一覧表

住居番号	時期	アラーン	壁	高さ	周溝	床	カマド	床面	柱穴・ビット	備考
1982年調査										
1	12C~13C	隅のある梢円形 2.7×2.0m			南壁に変化があ り	平坦で水平 軸弱であるが良好				床面北側に石が散在
2	10C	隅丸方形 4.0×3.6m	東壁18cm 南2.5cm 西・北壁10cm		東壁中央に焼土 から東へ約10cm	平坦であるが、西 側斜、地弱				
3	10C	隅丸方形 4.0×4.5m	東・西・北壁 10~20cm 南壁4cm	幅5~15cm 深さ3~5cm 東・北西壁沿い、 南壁沿い	西壁中央 粘土カマド	鉢弱	ピットかP-1~Pまで検出			土師器を中心に出土
4	11C後半~ 12C	並んだ方形 4.5×3.8m	東壁9~20cm 南壁6~18cm 西壁19~21cm 北壁15cm	南壁より掘れて 高さ18cm、幅3cm、 高さ3cm、深さ6cm	中央に堅硬な部分 あり	東壁より掘れて 高さ15cm、幅15cm、 高さ6cm	西壁より掘 れて焼土あり	西壁中央より 掘れて焼土あり		灰陶陶器が比較的多く出土 第19、20、21号小窓穴と重複
5	9C	方形 9.0×10.0m	北壁13~23cm 東壁13~14cm							第1~16号小窓穴群によって柱 盤がかなり埋り込まれている。
1965年以前の調査										
1	9C	長方形 3.6×4.3m		周溝あり	東壁中央			西北隅に深さ14cmの小穴		全長約1.7mの巨大で実用的な竪道が あった。
2	11C後半~ 12C	方形 約4×約4.2m			西壁中央やや北 より石組み粘土 カマド		柱穴 (29)×33~34) (37×37~33)(34×48~42) 床窓穴 (34×36~42)			柱穴の位置はアンハバランスである。
3										存在が知られる程度にとどまる
4	11C後半~ 12C									石組みカマドや竪窓の構造を確認 する頭大石の構造を確認
5	11C後半~ 12C									存在が知られる程度にとどまる
6	10C	方形 約3.7×約4m			北壁中央やや東 より石組み粘土 カマド					竪窓12.3中央にしかも75×85cmの広 く「良」を記した墨書き土器出土

## 第9表 丘中学校南道跡生層址一覧表

生層番号	生層時	形	アラシ	號	西	周	溝	カマド	床	面	柱穴・ピット	備考
1	9C	方形	3.64×3.21m	周壁37~40cm 北壁29~36cm 高さ4~5cm	幅10~7cm カマドを除く全周 高さ4~4.5cm 高さ4~5cm	東壁中央 竪窓中央やや南よ り 竪窓切妻は斜窓	平坦に堅い部分 柱穴	西面 竪窓中央(標準) 柱穴	西面 竪窓中央 柱穴	西面よりは堅い部分、 柱穴よりは柔軟 の壁の断面を示す 所上の 厚さ14.6cmなど に至るまでが見られた。	西面開口部と柱穴を壁上、 床面より15cmほど上の 厚さ14.6cmなど に至るまでが見られた。 柱穴は突出しなかった 床面中央に1.7%×0.84m、 -20cmの小窓穴、すり床状 で底面は平だ。	
2A	10C	方形	4.40×4.50m	45~55cm	幅12~15cm 高さ4~5cm 高さ4~5cm	東壁中央 竪窓中央 柱穴	平坦で堅い 柱穴	西面 柱穴	西面 柱穴	西面よりは堅い部分、 柱穴よりは柔軟 の壁の断面を示す 所上の 厚さ14.6cmなど に至るまでが見られた。	西面よりは堅い部分、 柱穴よりは柔軟 の壁の断面を示す 所上の 厚さ14.6cmなど に至るまでが見られた。	
2B	10C	方形	3.34×3.68m	45~50cm	高さ4~5cm 高さ4~5cm	東壁中央 竪窓中央 柱穴	非常に堅い (石が3割)	西面 柱穴	西面 柱穴	西面よりは堅い部分、 柱穴よりは柔軟 の壁の断面を示す 所上の 厚さ14.6cmなど に至るまでが見られた。	西面よりは堅い部分、 柱穴よりは柔軟 の壁の断面を示す 所上の 厚さ14.6cmなど に至るまでが見られた。	
3	10C	白石	2.92×2.50 厚さ2.80m 高さ3.20m	北壁25~ 南壁25~ 西壁30cm	高さ2~3cm 高さ2~3cm 高さ2~3cm	東壁中央 竪窓中央 柱穴	平坦でろくが板張 高さ14cmのピット†	西面 柱穴	西面 柱穴	西面よりは堅い部分、 柱穴よりは柔軟 の壁の断面を示す 所上の 厚さ14.6cmなど に至るまでが見られた。	西面よりは堅い部分、 柱穴よりは柔軟 の壁の断面を示す 所上の 厚さ14.6cmなど に至るまでが見られた。	
4	10C	方形	3.90×4.20m	40~50cm	幅12~15cm 高さ4~5cm 高さ4~5cm	東壁中央 竪窓中央 柱穴	全体的に堅く、水平。 凹凸の断面が見られる 現り込んでいる 柱穴	西面 柱穴	西面 柱穴	北壁よりに90°×66~ -18cmの傾凹面の小窓穴を付けて から床面中央にかけて東より10cmほど浮いて火 の壁が作られた。	北壁よりに90°×66~ -18cmの傾凹面の小窓穴を付けて から床面中央にかけて東より10cmほど浮いて火 の壁が作られた。	
5	9C	長方形	5.00×4.05m	高さ50~54cm	高さ6~7cm 高さ6~7cm 高さ6~7cm	東壁中央 竪窓中央 柱穴	非常に堅く 現り込んでいる 柱穴	西面 柱穴	西面 柱穴	北壁より22°× -14cmの小窓で、小窓が作り輪 状が作られた。	北壁より22°× -14cmの小窓で、小窓が作り輪 状が作られた。	
6	11C	方形	4.10×3.84m	33~40cm	幅10~16cm 高さ3~4cm 高さ3~4cm	東壁中央 竪窓中央 柱穴	中空部分が非常に堅く 現り込んでいる 柱穴	西面 柱穴	西面 柱穴	中空よりやや堅牢に22× 33~16cmの断面よりに接 15×13、-15cmの柱穴	中空よりやや堅牢に22× 33~16cmの断面よりに接 15×13、-15cmの柱穴	
7	10C	方形	3.50×3.50m	高さ50~53cm	高さ5cm 高さ3~4.5cm	東壁中央 竪窓中央 柱穴	現でやけり屢々現され いるが、中央部分はよ く現れる。	西面 柱穴	西面 柱穴	東壁よりに40°×33、 厚さ18cmの大きな石が壁に衝突 して現われていた。	東壁よりに40°×33、 厚さ18cmの大きな石が壁に衝突 して現われていた。	
8	~12C	方形半	4.20×4.50m	幅15cm 高さ42~45cm	高さ10~12cm 高さ10~12cm	東壁中央 竪窓中央 柱穴	良好で体的によく現 れられる。	西面 柱穴	西面 柱穴	西面よりピット状の隙り込み、 -15cmの断面より4~6cm の柱穴	西面よりピット状の隙り込み、 -15cmの断面より4~6cm の柱穴	
9	11C後半	方形	4.00×3.40m	35~42cm	高さ10~13cm 高さ10~13cm	東壁中央 竪窓中央 柱穴	木の間にようやく現れる 現れる。	西面 柱穴	西面 柱穴	東壁より 現れる。	東壁より 現れる。	
10	10C										充満することができるず、存在を確認したにとどまる。	
11	10C	方形	3.42×3.48	25~35cm	幅13~15cm 高さ3~7cm 高さ3~7cm	東壁中央 竪窓中央 柱穴	北壁、東壁よりの断 面がやや現くはじめて いる。	西面 柱穴	西面 柱穴	20×17~23cm×23×22、 -24cmの2本の柱穴が 他の4ヶ所の柱穴と 並んで現れる。	20×17~23cm×23×22、 -24cmの2本の柱穴が 他の4ヶ所の柱穴と 並んで現れる。	
12	9C	方形	5.50×5.20	高さ58~59cm 高さ50cm	カマドを張り出しき 部分が現れる 柱穴	東壁中央 竪窓中央 柱穴	現れ込んでいた 柱穴	西面 柱穴	西面 柱穴	南西隅に75×50、 -15cmの横に形成する柱状のピット あり、西北隅に13×10~15×5cm位の断面石9ヶ所 あり、-55cm、-53cm 62×60、-51×55、 51×55、-60cm SAK37、-60cmの柱の断面 30×28、-17cm 50×30、-12cmの2つの 石が下に現れていた。作業台？。	南西隅に75×50、 -15cmの横に形成する柱状のピット あり、西北隅に13×10~15×5cm位の断面石9ヶ所 あり、-55cmほど入り凹めた中に現れていた。南西隅 に50×53、-55cmの柱の断面 50×53、-55cmの柱の断面 SAK37、-60cmの柱の断面 30×28、-17cm 50×30、-12cmの2つの 石が下に現れていた。作業台？。	
13	10C(?)	方形	3.00×3.44	42~45cm	高さ13cm 高さ4~5cm 高さ4~5cm	東壁中央 竪窓中央 柱穴	平坦でよく現み認めら れている	西面 柱穴	西面 柱穴	床面中央に現れる。	床面中央に現れる。	

## (2) 大型住居

本址の性格は不明な点が多い。県下の主な大型住居の比較検討により本址の性格を明らかにしたい。県下の主な大型住居は第10表の通りである。最大なものは、長野市三輪遺跡2号住居址の11.8m×9.7m、塩尻市平出遺跡11号住居址11.0m×11.0mである。古墳時代後半を中心として類例が知られる。

古墳時代後半期の大型住居の特徴としては、祭祀関連遺物が出土することである。佐久市市道遺跡4号住居址からは管玉1、白玉1、同7号住居址からは白玉に、土製勾玉1が出土している。三輪遺跡でも高環が多く出することが報ぜられている。このようにこの頃の大型住居址は祭祀権を有した家長層級の住居として位置づけることができる。

住居構造としては、柱穴は4本を基本としているが、田中沖8号住居址のように6本柱穴のものもある。この外、市道4号は張り出しピットを有している。カマドは普遍的には認められず、もたないものもある。

奈良期のものは遺跡数も少なく、調査例も多くない。そのためか、大型住居の例は多くない。飯田恒川倉外地籍76号住居址は、その多くが調査区域外にかかるが、1辺が13mに達する。この他に笑輪町中道遺跡5号住居址が上げられる。倉垣外76号は周壁下に敷石列が施されている。同様な例として、長野市塩崎小学校地点22号住居址が上げられるが、7.0m×6.5mとやや小型である。中道5号住居址も周壁下に礎石らしき平石が配されている。中道5号からは奈良三彩、転用鏡が出土している。恒川は官衛址との関連が濃厚であるし、塩崎例も、柱穴址や「專司」の陰刻された須恵器の出土などから官衛址あるいはそれに準ずる遺構と考えられている。中道5号も牧との関連が予想され、文字を持った人の住居と考えられる。このように、奈良期の大型住居は、上流階級の住居であったと予想される。また、住居の構造も、基本的には4本の主柱穴をもつが、礎石列などその構造も他の一般の住居址とは違いをみせている。

平安期になると調査数の多さの割に大型住居の発見はほとんどない。わずかに中道20号、23号、伊那福島遺跡C7号住居址などが上げられる。このほかにやや小型ではあるが足場遺跡8号住(7.55m×5.8m)がある。中道20号は中道I(8~9C)期、23号は中道III(10~11C)期に属す。最大なものは中道20号のもので8.45m×8.25mでありほぼ方形を呈す。出土遺物では鉄製品が目を引く。中道20号からは紡錘車輪1、刀子3、尾鉋1、骨金具1、鍵、縫口、鉄鋸などが、23号からは鉄鋸3が、伊那・福島C7号からは鉄斧1、刀子1、釣具1が出土している。このように鉄製品を所有する農民層の住居と位置づけられよう。

住居構造としては中道20号が、先の5号と共通したあり方を示している。23号は、4本柱穴で方形に配されている。伊那福島C17号は主柱穴が各コーナーに寄っている。基本的には4本柱穴であるが補助柱穴を有する。これに対し丘中学校5号址は4本柱穴であるが、カマドがない。このように前者に対して、生活址としての条件が十分に備っていない。規模の大きさなど他と比し

第10表 県内における古墳～平安時代の大型住居址

時期	遺跡・遺構名	所在地	規 模	ブ ラ ン	面 積	備 考	文 献
鬼 高 期	三輪 2 号	長野市	11.8×9.7 m	隅丸短長方形	114.5m <sup>2</sup>	ペット状遺跡	「三輪遺跡」長野市教委 1980年
	田中沖 8 号	長野市	10.3×9.6 m	方形	98.9m <sup>2</sup>		「田中沖遺跡」長野市教委 1980年
	市道 H-4 号	佐久市	9.2×(5.90)			白玉、管玉	「市道」佐久市教委 昭和51年
	市道 H-7 号	佐久市	8.5×(7.1)			白玉、管玉	「市道」佐久市教委 昭和51年
奈 奈 平 安	三塚 H-1 号	佐久市	一辺 7.2		約50m <sup>2</sup>		「三塚」佐久市教委 昭和50年
	平出 11 号	塙尻市	11.0×10.0	短長方形	110.0m <sup>2</sup>		「平出」 昭和30年
	山岸 34 号	塙町	8.7×9.0	方形	78.3m <sup>2</sup>		「中央道報告」 昭和50年
	前ノ原 7 号	飯田区	8.2×7.1	隅丸方形	58.2m <sup>2</sup>		「前ノ原塙原」飯田市教委 昭和50年
奈 奈 平 安	天白 B-10 号	塙町	一辺 7.8	方形	約60.8m <sup>2</sup>		「中央道報告」 昭和50年
	恒川塙場外 76 号	飯田市	一辺 13m	不明		敷石列	長野県学会誌 44号
	中道 5 号	箕輪町	9.45×8.45	隅丸方形	80.6m <sup>2</sup>	周溝に礎石 奈良三彩	「中央道報告」 昭和48年
	塙崎 22 号	長野市	7.0×6.5	方形	43.8m <sup>2</sup>	敷石列	「塙崎遺跡群」 1979年
中道 20 号	箕輪町	8.45×8.25	隅丸方形	70.6m <sup>2</sup>	周溝に礎石		「中央道報告」 昭和48年
	中道 23 号	箕輪町	7.50×7.25	方形	54.8m <sup>2</sup>		「中央道報告」 昭和48年
丘中 5 号	塙尻市	10.2×9.4	短長方形	95.1m <sup>2</sup>			

存在が際立っており、更に詳細な検討が必要である。

以上、わずかな資料から大型住居をみたが、その在り方に違いがみられる。本址も住居規模からは、古墳後期に共通する大きさであるなど、本址の属す時期も微妙である。住居構造などもたち入った検討も必要である。また、資料の抽出は1辺7m、面積約50m<sup>2</sup>を標準としたが、集落内でどのような位置にあるかも検討されなければならない。

(石上 周藏)

### (3) 小豎穴

第III章第3・6節の説明でも述べたように寺名を記した墨書き土器・瓦・青銅製の花瓶から寺の存在を強く推定できる。そして第1号から第16号までの長方形又は横円のほぼ正確に南北又は東西を指す小豎穴が、15×10mの範囲内に16ヶ所も存在することから、これらの小豎穴は寺に伴う土壙墓の可能性も推定できよう。ただし土壙内からの遺物の出土がないこと、墨書き土器と瓦・青

銅製の花瓶との間には約200年の時代差があることから、さらに考察を必要としよう。

第17・18号の小豎穴は対をなすものと考えられ、第18号上面には環状土器集積遺構が覆っているが、両者の関係は調査所見からは明確にできなかった。

第4号住居址と重複する第19・20・21号の小豎穴は、第19・20が対をなすと考えられ、これら的小豎穴は、形状等から住居址に付随する貯蔵穴と考えられないこともない。

いずれの小豎穴も遺物を出土していないので、明確なことは言えず、考察は推定の域をでていない。

(小鳴 秀典)

#### 第4節 環状土器集積遺構

(1)土器 体型という一器種に限られる本遺構の土器の様相を把握する為に、分類、検討してみたい。

分類 主に口縁形態、胴部の外開形態を指標として分類した。(第48図)

○鉢A類 底部から口縁にかけてほぼ直線的に大きく外開し、口縁端部はほとんど外反しない。

第29図1 (基本形態1)

○鉢B類 底部から口縁にかけてA類より急な傾きで外開し、口縁端部がわずかに外反するもの。

第29図2～5 (基本形態2)

○鉢C類 底部から口縁にかけてB類より急な傾きで外開し、口縁端部がB類より外反するもの。

第29図6・7 (基本形態6)

○鉢D類 底部から口縁にかけてB類程度の傾きで外開し、口縁端部がC類より外反するもの。

第29図8、第30図9 (基本形態8)

○鉢E-1類 底部から口縁にかけて胴部が少し張りながら外開し、口縁部がD類より外反するもの。第30図10～14 (基本形態11)

○鉢E-II類 底部から口縁にかけて胴部がE-1類より張りながら外開し、口縁端部の外反がE-I類と同程度のもの。第30図15～17 (基本形態15)

○針F類 底部から口縁にかけて垂直に近い立ち上がりで外開し、口縁端部がD類とE類の中間程度の反りで外反するもの。第31図18～20 (基本形態18)

これらの分類された土器をブロック別にみると、次の様になる。(第25、27、28図) A類:(1)-Iブロック B類:(2)-IIブロック、(3)-IIIブロック、(4)、(5)-IVブロック C類:(6)-IIブロック、(7)-IVブロック D類:(8)-Iブロック、(9)-IVとIブロック E-I類:(10)、(11)、(14)-Iブロック、(12)、(13)-IIブロック E-II類:(15)-IIブロック、(16)-Iブロック、(17)-IIかIIIブロック F類:(8)-Iブロック、(9)-IIブロック、(10)-IIIブロックとなる。

このようにしてみると、A類、C類、D類、またIVブロックに復元、実測可能な個体数が少な



第48図 環状土器集積遺構出土土器分類図

いのではっきりしたことは言えないが、A～C、F類が各ブロックにわたり散在しているのに対し、胴部が張り出すという特徴を持つE類のみが、Iブロックの中心とIIブロックの南側に集中していることが分かる。

なお、個体数が少なく、A類とC類は計算できなかったが、径高指数  $a$  を類別に計算してみると次のようになる。A類：不明、B類： $a=64.7$ 、C類：不明、D類： $a=44.9$ 、E-1類： $a=52.7$ 、E-II類： $a=60$ 、F類： $a=74.7$ となる。この計算の結果と、A類、C類の器形から推定される径高指数を考え合わせると、A類とD類の  $a$  が最も小さく、C類とF類の  $a$  が最も大きくなるであろうことが予想される。

本遺構から出土したこれらの土器の体型土器は、成形については雑で、器面は内外面ともロクロナデ、底部は回転糸切りが切りっ放しで、製作後藁の様な物を敷いた上に置いたとみられる太い沈線状の痕跡を残している。また、この成形は平安時代後半の足高高台付杯などの土器群の成形に類似しており、おそらく本遺構出土の鉢もこの足高高台付杯と同時代もしくはそれ以後のものと考えられ、年代を示すならば11世紀後半以後13世紀前後と幅をもって推定しておきたい。

なお、本遺構出土鉢型土器群の特徴として次の諸点をあげ得る。(I)炭火物付着などの使用痕的なものが見られない、(II)粗い成形のうえに、底部の厚さがわずか2mm程度のもの11がある。(III)出土状態が環状をなしている。(IV)底部が上に向いて出土しているのがかなりある。(V)E類がIブロックとIIブロックに集中している他、4ブロック間の違いがあまり認められない(VI)土器はローラム平面上に堆積しており、土器配置のための掘り込みは検出されなかった。(VII)を除いてすべての鉢が同ブロック内、また付近の区画内の破片で接合された。などである。これら(I)～(VII)までの点に留意すると、まず鉢型土器の使用方法として煮沸的なものとは考えにくい。また底部が非常に薄い物もあるので、日常的に使用されたとも考えられず、おそらく供膳的なものであろうと予想される。次に出土状態についてだが、底部が裏がえしに出土しているものが多いことからして安置されていたとは考えにくい。また、掘り込みの無い平面に投げ棄てられたとすると、1個体中の破片はかなり散乱するはずだが、ほとんどのものが付近の区画内同志で接合しているので、投げ棄てられた可能性は少ないと考えられる。ここで、4ブロック間の違いがあまり認められないことや、遺構が環状をなすという規則性を持つことなどをも合わせて考察すれば、本遺構の鉢型土器群の性格として、祭祀に使われた後、短期間もしくは一度に、何らかの目的で環状に集積

されたものではなかろうかと推定することができる。

(前田 清彦)

(2)性格 本址は以上のように從来まだ知られていなかった特異な遺構であり、それは多分に祭祀的色彩の強いものであった。

県内で、土器を中心とした祭祀遺構としては、長野市駒沢新町遺跡、中野市大ロフ遺跡、飯山市田草川尻遺跡、そして鼎町天伯B遺跡などが著名である。しかし、これらは古墳時代に属するもので、今回の丘中学校でのものとは時間的な差が問題となる。残念ながら、現在のところ丘中学校遺跡と同時期のものは知り得ない状態である。しかし、こうした時間差を一応度外視して考えるとこれらの祭祀遺構との間に類似点が多い。すなわち、駒沢新町1号は、4.5×3.0mの若干掘り凹めた方形の範囲に土師器の壺・甕・高环等の完形土器300点を石製品・鉄器等とともに集積したもので、3号は径10mの円形に、多量の甕・壺、高环などの土器を意識的に破壊してマウンド状に積み上げたものであり、これらの土器には使用された痕跡が殆んど認められていない。丘中学校例も2.5×2.0mの範囲に、使用したことは考えられない状態の土師器鉢を、環状に意識的に集積しており類似する部分が多い。また、駒沢新町は「湧水をともなう……農耕祭祀の跡で…この遺跡の前面には多くの水田可耕地があり、その背後には…弥生中期から平安にわたる集落が帶状に存する。まさに徳間遺跡群の要の位置に立地する。遺跡群を祭祀遺跡、水田可耕地の立地の在り方から徳間遺跡群の共有の祭祀のあと」(笠沢1972)と考察されているが、土器集積の在り方、遺跡の立地などは、まさに東方段丘崖下に水田可耕地を有し、田川左岸段丘上に帶状に連なる高出遺跡群中の要の位置を占めている丘中学校遺跡にも当てはまる条件である。こうした遺跡立地の問題のほかに、丘中学校の環状土器集積遺構を特異なものとしていることに、出土土器が土師器のみである点があげられ、しかもこれら土師器が鉢という同一形態を呈するもののみで構成されていることである。当時の祭祀に使用される土器は土師器中心の傾向が強く、「特定な場所の土をもって祭器を作ることが神々の意に叶うものであり、それぞれの地域での神聖視された特定個所の土をもって祭器を隨機に作るのが原則であった」(小出1981)と言われている。したがって、高出遺跡群を構成する個々のムラ単位あるいは丘中学校遺跡を構成する各イエを単位として祭祀用の仮器としてこれら非常に規画性の強い鉢形土器を作り、水田地帯あるいは田川を望む台地端において祭祀を執り行ない、使用済みとなったこれら祭器を一括廃棄したものと推定される。土器の検出状態から分割された4ブロックが、果して祭祀の回数を示すものなのか、あるいは共同体の数を示すものなのか興味深い点である。

土器を用いた祭耕儀礼を中心とした祭祀は4世紀末に始まり、5世紀にピークに達し、6世紀中頃には衰退したと考えられている。しかし、これ以降にも從来まで単なる土器集中地区あるいは土器捨て場として把えられている遺構もあり、これらの中には祭祀的性格を有するものも含まれているのではないかと推測される。今後の検討が強く望まれる。

なお、近接する時期に寺院址の存在が予想されてもいるため、これとの関連性も考慮に入れておく必要があろう。

(小林 康男)

#### 参考文献

- 大場豊雄 「長野市発見の古代農耕祭祀遺跡を中心として」 信濃18-8 1966  
小出義治 「祭祀と土器」 神道考古学講座3 1981  
並沢 浩 「祭祀遺跡」 上水内郡誌歴史篇 1972  
高橋 桂 「飯山市田草川尻遺跡緊急発掘調査報告書」 1973

### 第5節 墨書と瓦と仏具

今回の調査では、5個体の墨書き土器の出土があった。第5号住居址（9世紀）からは、「五」、「生？」が、第3号住居址（10世紀）では「〇〇寺」と判読不明のものが、また第4号住居址（8世紀）からは「〇色寺」と読めるものがそれぞれ出土している。このうち、底部外面に墨書きされたものが第5号址の「五」「生？」で、他は全て体部外面である。かつて、岡田正彦氏は、「信濃の墨書き・刻書き工器」（岡田1978）で、墨書き文字の内容から、(1)遺跡・遺構の性格を示すもの、(2)遺物の所有者や所轄機構体を表わすもの、(3)その遺物の使用目的を示唆するもの、(4)吉祥勾的な内容をもつもの、(5)意義不明のものに分類している。今回出土した墨書き土器の中で、特に重視されるものは、「〇色寺」「〇〇寺」と書かれたもので、遺跡・遺構の性格を示すものと考えられ、寺院址の存在を暗示するものとして重要である。発掘調査では、直接寺院址と考えられる遺構は検出されなかったが、第3号および第4号住居址居住者が、寺院と深い結ながりがあったことは間違いない、本遺跡内のどこかに、あるいは本遺跡内ではないにしても隣接する高出遺跡群内には、該期の寺院が営まれていたことは充分予測される。当時、高出遺跡群をめた塩尻市大門から松本市芳川・出川の地域には、良田郷が置かれたとされており（原1974）、今回、その存在が知られるようになった寺院も、この郷に付属するものであることは間違いない。従来、この地に寺院が存在したという記録はなく、今回の発見は古代の集落・信仰等を考えるうえで極めて重要な意義を有するといえよう。

また、中世に入ると、青銅製の花瓶および瓦とやはり寺院に関連する出土遺物があり、この地に寺院が存在していたことを間接的ながら示している。おそらく、平安時代に建立された寺院が存続していたものと考えられる。中世においても、寺院の存在を示す記録は見当らず、これらの遺物は当地域の寺院研究に新知見を加えたものとして貴重である。 (小林 康男)

#### 参考文献

- 岡田正彦 「信濃の墨書き・刻書き土器」 中部高地の考古学I、1978  
原 嘉藤他、「東筑摩郡・松本市・塩尻市誌第2巻歴史上、原始・古代篇」 1974

## 第V章 結語

本遺跡は、塩尻市広丘の高出、野村、吉田地区に分布する、広範に渡っての遺跡群の中の丘中学校敷地内にある、通称丘中学校遺跡と言っている場所である。

国鉄広丘駅から東へ約2Km、松林に囲まれた中に丘中学校があり、東側の段丘下を田川が流れている。此の度丘中学校では、現在の体育館の北側の松林を切り開き、新しく更にもう一棟体育館を建てることになり、期日も限定された中で、緊急発掘調査が行われた。

この高出遺跡群は、吉田の郷のおかれた、奈良時代から古くは古墳時代、下がっては室町時代にかけて栄えた、土師時代の遺跡として広く知られている。かつて土師器に墨書きで良田と記された貴重な土器片が出土したこともあり、その当時は、吉田を良田と書かれていたのかとも想像される。体育館を建てるための限られた面積内の発掘調査であったので、これをもって全体像を知ることは、到底不可能であるが、非常に貴重な遺物や、遺構がいくつか発見されたのでその主なものをひろって見る。先ず遺構では、平安時代の住居址は、比較的小さく、いうなれば、一辺が3mから5m位の隅丸方形住居址が大部分である中で、縦、横9m、10mという大きなもので、しかも四隅に太丸の主柱穴があり、平安時代住居址としては、余り例を見ない、特筆すべき、貴重な住居址が発見された。

次は、破碎土器を敷きつめた場所が発見され、大いに注目された。これも例を見ないので、速断はできないが、土器捨て場とはどうしても考えられず、何らかの意義をもった遺構とも考えられる。更に5号の大型住居址を中心とする地域に、16ヶ所にものぼる土壙が発見された。おそらく墓壙群ではなかろうかと思う。

以上いくつかの平安時代の貴重な遺構が次々と発見された中で、驚くべき遺構が発見されて、我々発掘者一同の目を見晴らせたものがある。それは弥生から古墳時代でも初期にあたる、方形周溝墓一基が発見されたことである。一辺が13mの方形状に溝を巡らした中に、人間一人寝られる位の長方形の土壙が、周溝とは一致しない、斜め状に作られていた。出土した遺物から考察すると、かなり身分のある、この地を支配した族長の墓かと推察される遺構で、松本平では例を見ない大変貴重なものである。

遺物については、やはり土師器が量的に一番多く、次は須恵器、灰釉陶器の順で、いずれも平安時代のものであったが、この中で異質のものが数点見つかっている。すなわち第3・4号住居址から出土した土師器の皿に、○○寺とか、○色寺と墨書きされたものであり、更に形の良好な口縁の部分が欠損した、小形の青銅製の花瓶が一口見つかった。専門家の鑑定によると、慈覚院で、時代は室町期頃のものであるとのこと。形といい、製品としても立派な逸品である。

続いて、ハケメのついた瓦の破片が出土した点があげられる。現存の瓦とはかなり違った、古いものには間違いないが詳細は判然としていない。いづれにしても、以上の遺物から推察すると、寺院と深くかかわりのあることが考えられ、場合によっては、寺の址か又は近くに寺があった可能性が出てくる。

次は先に述べた方形周溝墓から出土した遺物についてであるが、全て中心部にある長方形の土壙の中から出土している。

最初に発見されたのは、鉄鋼の鏽びついた一固まりのもので、小林学芸員は早くから、方形周溝墓だと断言していましたが、やはり裏づけられるものが出て来ないと断定出来ないので一同不安な気持で作業を続けていたが、この鉄鋼が発見されて一同俄かに活気づいたことは否めない事実であった。これを機に更に掘り進めていくと、コバルトブルーに輝く小さなガラス玉が発見され、一同大いに緊張し、好奇心も手伝って更に慎重に根気よく探した結果、遂にガラス玉110ヶ、管玉5ヶの多きに達した。首飾りの一部を構成したものであろうことが伺えられる。以上遺物の出土状況を考えると、多くの平安時代の遺物の中にあって、このような異質のものが数多く出土したことは、この遺跡が如何に複雑多岐に渡った特異な、そして貴重な遺跡であったかが伺うことができる。

発掘面積は限られた狭い範囲内であったが、大きな松の切り株が散在し、これを採り除く作業が一同を大いに苦しめ、難作業が続いたわけであるが、これに参加・御協力いただいた、丘中学校、並びにPTAの皆様には深く感謝いたします。

丘中学校周辺は、古墳時代から平安時代にかけての大集落が展開されていたものと考えられていて、今回の発掘調査によってそれが裏づけられ、しかも内容が豊富であった点、極めて高い評価が得られるものと期待するものである。

(花村 格)

第11表 丘中学校遺跡出土土器一覧表

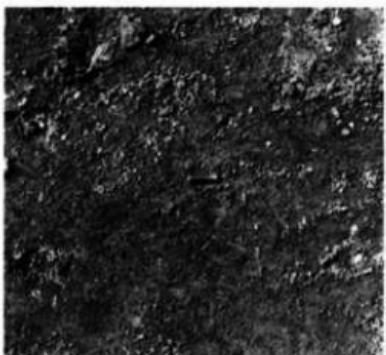
住居社 番号	番号	種別	器種	法 量			色 調	成形・調整の特徴	備 考	
				器高	口径	底径				
1 1号 住居 社	1	須恵	杯	—	27.4	—	青灰色 青灰色	ヘラナゲ・内型	片口が付く	
2 2号 住居 社	1	土師	杯	4.3	13.4	5.3	黑色 赤褐色	ロクロナゲ・回転永切り	内面は黒色処理	
	2	*	*	5.7	15.2	6.9	*	ロクロナゲ・内面にヘラミガキで暗文有り	内面は黒色処理	
3 号 住 居 社	1	*	*	4.2	14.1	6.1	明褐色 明褐色	ロクロナゲ・回転永切り	内面は覗けている	
	2	*	*	3.1	11.8	5.8	明赤褐色 明赤褐色	*	*	
	3	*	*	—	13.7	—	黑色 灰白色	ロクロナゲ	内面は黒色処理	
	4	*	*	—	13.1	—	明褐色 明褐色	*	器腹が覗けている	
	5	*	*	—	15.1	—	赤褐色 赤褐色	*	内面は黒色処理	
	6	*	*	—	18.8	—	*	*		
	7	*	*	—	13.2	—	*	*		
	8	*	*	—	13.7	—	*	*	表面無色 内面無色	
	9	*	*	—	—	—	*	ロクロナゲ	内面を黒色化 内面無色	
	10	*	*	—	—	6.6	*	回転永切り	内面は黒色処理	
	11	須恵	2.6	9.3	7.0	灰白色	灰白色	ロクロナゲ・回転永切り	内面に擦状の付着物有り	
	12	土師	小盤	—	—	6.8	暗黄褐色 暗黄褐色	*	*	
	13	*	*	—	22.9	—	暗褐色 暗褐色	断面に指圧痕あり、外縁にハケ目あり？施ロクロナゲ		
	14	*	*	—	19.5	—	赤褐色 赤褐色	結合部	断面に指圧痕を用いたハケ目、施ロクロナゲ	
	15	*	*	—	22.5	—	*	赤褐色 赤褐色	内面に指圧痕を用いたハケ目、以下焼成痕、外縁、口縁無色	
	16	*	*	—	23.4	—	*	*	外縁無色ハケ目、以下焼成痕、外縁口縁ロクロナゲ、以下	
	17	*	*	—	—	12.7	暗褐色 暗褐色	ロクロナゲ・回転永切り	焼成土器無色地塊 出土主張と照合する。	
	18	*	*	—	—	9.0	暗赤褐色 暗褐色	内面底部分と外縁にハケ目あり	外縁に黒色付着物 あり	
	19	須恵	—	—	21.3	—	灰黑色 灰黑色	ロクロナゲ		
4 号 住 居 社	1	土師	杯	4.2	12.1	5.3	黑色 黄褐色	ロクロナゲ・回転永切り、内面ヘラミガキで暗文有り	黒色無地 内面無地	
	2	*	*	—	12.5	—	黄褐色 *	ロクロナゲ		
	3	*	*	—	13.2	—	赤～墨褐色 *	*		
	4	灰陶	*	—	18.8	—	暗灰白色 暗灰白色	*		
	5	*	*	—	17.1	—	灰白色 灰白色	*		
	6	*	段皿	2.3	12.2	6.9	*	・回転ヘラケズリ		
	7	*	*	—	2.5	13.1	5.3	*	・網部下半部ヘラケズリ、底部ヘラキリ	
	8	*	*	—	—	5.8	茶白色 茶白色	ロクロナゲ・回転永切り		
	9	綠釉	段皿	2.2	12.5	6.6	暗黄褐色 暗黄褐色	*	・回転ヘラケズリ	
	10	土師	舟型	6.4	23.5	6.8	明赤褐色 明赤褐色	*	・回転永切り	
	11	*	*	—	5.1	13.3	7.5	明褐色 明褐色	ロクロナゲ	
	12	*	*	—	—	6.2	*	・回転永切り		
	13	灰陶	杯	4.2	13.0	7.0	灰白色 乳白色	*	・回転ヘラケズリ	
	14	*	*	—	—	7.7	乳白色 乳白色	*	・網部下半回転ヘラケズリ	
	15	*	*	—	7.0	15.6	7.6	灰白色 灰白色	*	
	16	*	*	—	—	8.0	*	・回転ヘラケズリ	内面に黒色付着物 あり	
	17	土師	碗	—	—	10.6	赤褐色 赤褐色	・皮筋回転永切り→ロクロナゲ		
	18	*	豆皿	—	—	21.9	明褐色 明褐色	内面ヘラナゲ、内・外縁共にハケ目	内面に焼入上げ痕 あり	
5 号 住 居 社	1	*	*	—	4.9	13.6	7.2	黑色 茶褐色	ロクロナゲ・回転永切り→ヘラケズリ、内面にヘラミガキで暗文有り	黒色処理
	2	*	*	—	4.8	11.5	6.0	*	ロクロナゲ・回転永切り、内面にヘラミガキで暗文有り	*
	3	*	*	—	—	15.0 (7.7)	*	黄褐色 黄褐色	*	黒色無地、内面に 擦状の付着物
	4	*	*	—	—	6.0	*	*	*	

住居址 固番号	番号	種類	部数	注		色	調	成形・調整の特徴	備考
				脚高	口径				
				底径	底深				
5号住居	5	頸部	6	4.7	11.8	7.0	青灰色	青灰色	ロクロナデ・回転糸切り・内面にヘラミダキで暗文あり
	6	*	*	3.8	13.5	7.2	*	*	*
	7	*	*	—	12.0	—	*	*	ロクロナデ
	8	*	*	—	—	5.5	*	*	—回転糸切り
	9	*	*	—	—	5.5	*	*	*
	10	*	背負	—	—	11.5	白灰色	*	—回転ヘラケズリ
	11	*	*	—	—	10.5	青灰色	*	*
	12	土師	チヅク ムシ王跡	2.5	7.0	—	暗黄褐色	暗黄褐色	指によるナデ、口縁部一帯に刺みあり
	13	頸部	杯盤	—	—	—	青灰色	青灰色	ロクロナデ・回転ヘラケズリ(時計回り)
	14	*	*	—	16.0	—	*	*	*
	15	*	*	—	15.5	—	灰褐色	ロクロナデ	
	16	*	長瓶瓶	—	—	8.2	*	青灰色	ロクロナデ・回転ヘラケズリ、回転糸物一ロクロナデ
	17	*	*	—	—	—	青灰色	青灰色	複合部台て本成形、ロクロナデ
6号住居	1	土師	鉢A	—	26.5	—	明褐色	明褐色	ロクロナデ
	2	*	*-B	14.5	22.4	12.2	*	*	* - 回転糸切り
	3	*	*	—	21.3	—	*	*	ロクロナデ
	4	*	*	—	24.6	—	*	*	
	5	*	*	—	24.9	—	*	*	
	6	*	鉢C	—	17.5	—	*	*	
	7	*	*	—	18.3	—	*	*	
	8	*	*-D	13.3	23.6	10.6	*	*	* - 回転糸切り
	9	*	*	—	10.2	23.5	10.4	*	*
	10	*	鉢E-I	11.9	22.5	11.3	*	*	*
	11	*	*	11.4	21.7	9	*	*	*
	12	*	*	—	18.7	—	*	*	ロクロナデ
	13	*	*	—	22.7	—	*	*	
	14	*	*	—	20.0	—	*	*	
	15	*	*-E-II	12.6	21.0	9.4	*	*	* - 回転糸切り
	16	*	*	—	17.2	—	*	*	ロクロナデ
	17	*	*	—	19.2	—	*	*	
	18	*	鉢F	13.6	18.2	10.3	*	*	* - 回転糸切り
	19	*	*	—	21.4	—	*	*	ロクロナデ
	20	*	*	—	17.6	—	*	*	
	21	*	*	—	—	12.2	*	*	ロクロナデ・回転糸切り
	22	*	*	—	—	12.3	*	*	*
	23	*	*	—	—	9.7	*	*	*
	24	*	*	—	—	10.6	*	*	*
	25	*	*	—	—	10.0	*	*	*
	26	*	*	—	—	14.0	*	*	*
	27	*	*	—	—	10.0	*	*	*
	28	*	*	—	—	11.5	*	*	*
	29	*	*	—	—	10.0	*	*	*
	30	*	*	—	—	10.6	*	*	*
	31	*	*	—	—	8.8	*	*	*
	32	*	*	—	—	9.8	*	*	*
	33	*	*	—	—	10.8	*	*	*
	34	*	*	—	—	12	*	*	*

# 図 版



上：方形周溝墓 下：方形周溝墓主体部



上：方形周溝墓主体部ガラス小玉・管玉出土状態  
下：方形周溝墓主体部鉄鏡出土状態



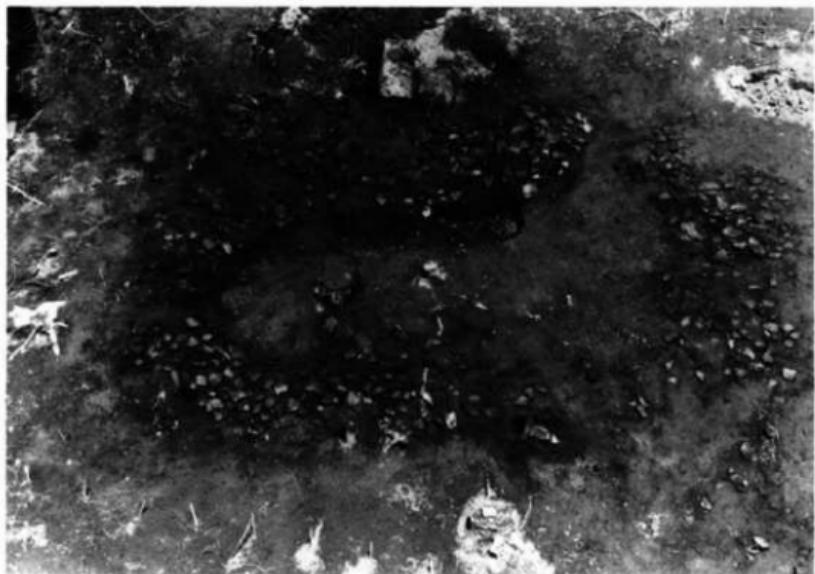
上：第1号住居址 下：第2号住居址



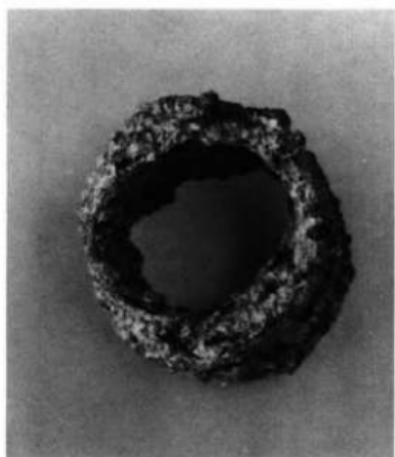
上：第3号住居址 下：第4号住居址・第19・20・21号小窯穴



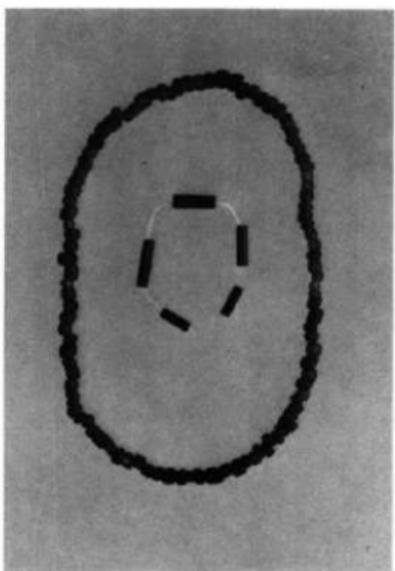
上：第5号住居址・第1～15号小堅穴  
下：第17・18号小堅穴



上・下：環狀土器集積遺構



1



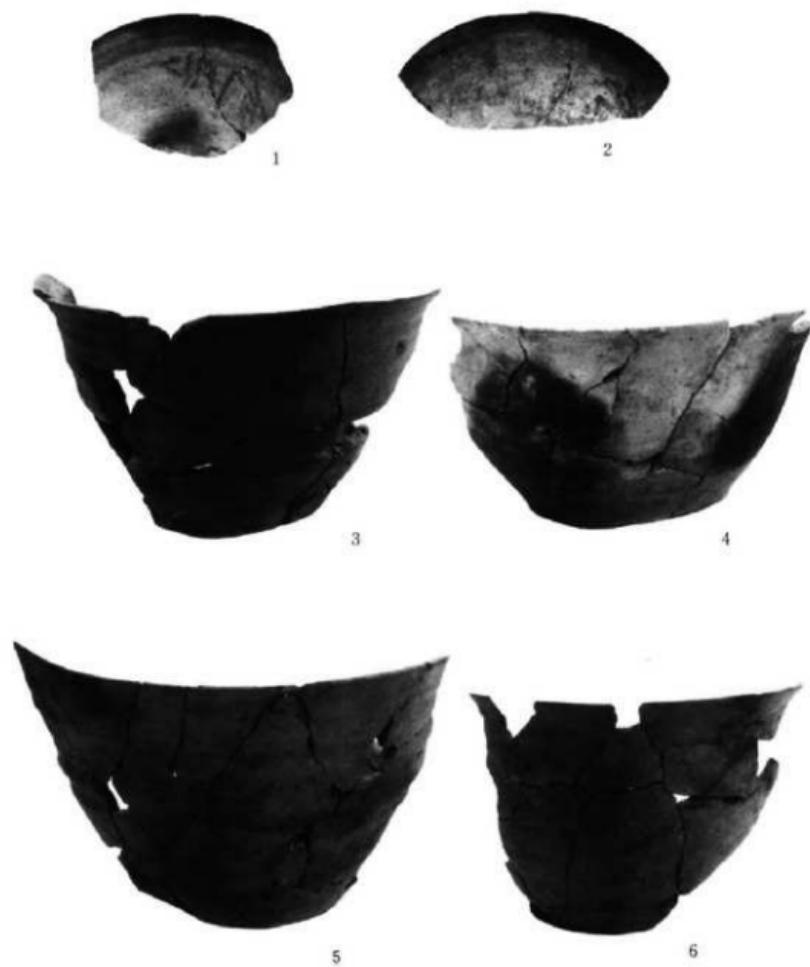
2



3

方形周溝墓出土遺物

1. 鉄鋤 2. ガラス小玉・管玉 3. 花瓶



住居址、環狀土器集柄造構出土遺物

1. 第4号住居址出土 2. 第3号住居址 3-6. 環狀土器集柄造構

---

## 丘中学校遺跡

——長野県塩尻市丘中学校  
遺跡発掘調査報告書——

昭和58年3月25日 印刷

昭和58年3月30日 発行

編集 丘中学校遺跡発掘調査団

発行 塩尻市教育委員会

印刷 ほおづき書籍株式会社

---